

財松江市教育文化振興事業団
文化財調査報告書 第3集



菅 汗 谷 横 六 群

1994年3月

松江市教育委員会
財松江市教育文化振興事業団

(財)松江市教育文化振興事業団
文化財調査報告書 第3集



文化財愛護
シンボルマーク

若沢谷 横穴群

1994年3月

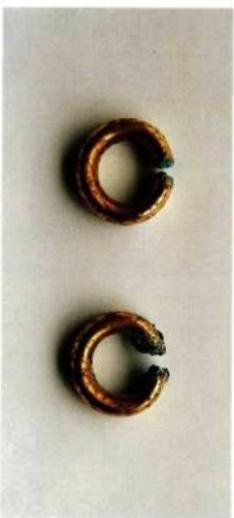
(財)松江市教育文化振興事業団



C-1号横穴墓の入骨



C - 5号横穴墓出土 金链环



B - 5号横穴墓出土 金链环



C - 5号横穴墓出土 银环



A - 3号横穴墓出土 高环



A - 3号横穴墓出土 脚付短颈壺

菅沢谷横穴群発掘調査報告書

- 本書は平成5年度において財団法人松江市教育文化振興事業団が実施した第2卸商業団地建設事業にかかる菅沢谷横穴群の発掘調査報告書である。
- 本発掘調査は松江市開発推進部商工業団地事務所の依頼を受けて実施したものである。
- 調査の組織は下記のとおりである。

依頼者 松江市開発推進部
部長 武田 富雄（平成5年5月まで）
田中 正友（平成5年6月から）
商工業団地事務所
所長 荒川 嶽
所長補佐 古藤 安正
専門技術員 松本 実
専門企画員 松浦 豊
技師 当木 政隆
主任 今岡 幸男
主体者 松江市教育委員会
事務局 教育長 諏訪 秀富
生涯学習部長 松尾 光浩（平成5年5月まで）
中西 宏次（平成5年6月から）
文化課長 中西 宏次（平成5年5月まで）
村松 榮（平成5年6月から）
文化財係長 関崎雄二郎
調査者 主事 中尾 秀信（平成5年6月まで）
財団法人松江市教育文化振興事業団埋蔵文化財課（平成5年7月1日新設）
理事長 吉岡 俊雄
事務局長 日高 稔夫
調査係長 中尾 秀信（平成5年7月から）
調査補助員 山尾 絹江
古藤 博昭
北島 和子

- 横穴墓の人骨の取り上げ及び鑑定は、鳥取大学医学部助教授井上亮孝先生に協力を得た。また、石棺の材質については、島根大学理学部地質学教室助教授沢田順弘先生の助言を賜った。記して感謝の意を表する次第である。
- 出土遺物は松江市教育委員会文化課で保管している。
- 遺物の実測は、中尾・古藤・北島及び市文化課嘱託員荻野哲二氏に協力を得た。
- 本書の執筆・編集は中尾が行った。

文化財愛護シンボルマークとは……

このマークは昭和41年5月26日に文化財保護委員会（現文化庁）が全国に公募し、決定した文化財愛護の運動を推進するためのシンボルマークです。

その意味するところは、左右にひろげた両手の掌が、日本建築の重要な要素である斗棋、すなわち斗と棋の組み合わせによって全体で軒を支える腕木の役をなす組物のイメージを表わし、これを三つ重ねることにより、文化財というみんなの遺産を過去・現在・未来にわたり永遠に伝承していくこうというものです。



文化財愛護
シンボルマーク

目 次

1. 調査に至る経緯	1
2. 位置と歴史的環境	3
3. 発掘調査の概要	9
(1) A-1号横穴墓	9
(2) A-2号横穴墓	9
(3) A-3号横穴墓	13
(4) B-1号横穴墓	13
(5) B-2号横穴墓	14
(6) B-3号横穴墓	14
(7) B-4号横穴墓	19
(8) B-5号横穴墓	19
(9) C-1号横穴墓	19
(10) C-2号横穴墓	24
(11) C-3号横穴墓	30
(12) C-4号横穴墓	30
(13) C-5号横穴墓	36
4. 出土遺物の検討	40
5. 小 結	45
6. 附 輯	
(1) 菅沢谷横穴群出土人骨について 鳥取大学医学部法医学教室 井 上 晃 孝	65
(2) 第2卸商業団地予定地内遺跡調査(高密度電気探査) 株式会社 日本海開発 浜 崎 晃	75

(題字は(財)松江市教育文化振興事業団 理事長吉岡俊雄氏による)



調査位置図

1. 調査に至る経緯

平成3年2月1日	株式会社鴻池組が「(仮称)湖南ニュータウン」造成事業にかかる事前調査として松江市教育委員会文化課に埋蔵文化財の分布調査を依頼。
7月10日～ 7月11日	分布調査を実施。
7月19日 (松教社第510号)	分布調査の結果、地域内の5か所で試掘調査を実施する必要があることを事業者と県文化課双方に報告。
平成4年1月24日 (商団第78号)	以前の地域を南に拡張する形で松江市商工業団地開発事務所から「松江市第2卸商業団地」造成事業のために再度分布調査依頼書が提出された。
4月21・22日 5月19日	分布調査を実施。調査地域内には古墳1基・古墳群1・尾根上平坦地4か所・横穴2穴を確認。
6月3日 (教文第148号)	本件調査結果について県教委に今後の取り扱いについて協議文書を提出。
6月8日 (島教文第143号)	県教育委員会から確認調査(試掘調査)を実施するよう回答あり。
6月15日～ 30日	日本海開発により第1次の電気探査を実施。開口していた横穴の周辺を中心に実施する。
7月3日 (教文第216号)	県からの回答と電気探査の結果を併せて最終回答を県・松江市商工業団地開発事務所に通知。平坦地については試掘調査、横穴群については確認調査、その他は保存することになった。
8月18日 (教文第330号)	今後の調査期間及び調査費の見込みについて、県文化課に協議文書を提出。
12月11日～ 平成5年1月12日	尾根平坦地・横穴群の試掘調査実施。

2月8日 (教文第723号)	試掘調査・確認調査の結果を報告。横穴群以外には遺跡・遺物とも存在しないことを確認。横穴群は最低10穴以上所在するものと推定した。
3月8日～ 3月31日	横穴群周辺地域の第2次電気探査を実施。その結果最大27～28穴の横穴が所在するとの報告書が㈱日本海開発から提出された。
3月29日 (教文第834号)	「遺跡発見の通知について」提出。以後、菅沢谷(すげさわだに)横穴群と呼称する(文化財保護法第57条の6第1項)
3月30日 (島教文第4- 32号)	遺跡発見通知書の受理。工事着手前に発掘調査を実施するように指導。
4月5日 (商団第2号)	「埋蔵文化財発掘の通知について」商工業団地事務所から提出。 (文化財保護法第57条第1項)
4月12日 (教文第37号)	「埋蔵文化財発掘の通知について」進達。
4月15日 (教文第48号)	埋蔵文化財発掘調査通知書の提出。 (文化財保護法第98条の2第1項)
4月26日	菅沢谷横穴群の全面発掘調査開始。
7月1日	新設された財団法人松江市教育文化振興事業団に発掘調査を移管。
平成6年1月31日	現地調査終了。

2. 位置と歴史的環境

菅沢谷横穴群 菅沢谷（すげさわだに）横穴群は松江市の南東に広がる標高約120mの丘陵斜面に所在しています。菅沢谷と呼ばれる谷筋の東斜面に、標高55～65m、幅約100mにわたって14穴の横穴が発見されました。

菅沢谷横穴群のある乃木地区にはこの他にもたくさんの遺跡があります。菅沢谷を起点としてこの谷を北東にくだっていくと、まず東に大久保遺跡・大久保古墳群があります。

大久保遺跡 大久保遺跡は大久保池の南側湖岸にあり古式の土師器片が採集されています。周辺には階段状の地形も認められますので弥生時代後期の四隅突出型と呼ばれる特殊な墳丘墓群が造られている可能性もあります。

大久保古墳群はその南方に隣接しています。全長24mの前方後方墳と4～5mの方墳3基とから成る古墳群です。前方後方墳は西側の墳丘の一部が崩れていますが概ね当時の形状を保っています。

さらにくだると西に奥山遺跡・友田遺跡群・田和山遺跡群があります。

奥山遺跡 奥山遺跡では横穴墓が3穴発見されています。いずれも7世紀初頭～前葉のころに造られた横穴で、人骨とともに象嵌の施された大刀等の副葬品が発見されています。

友田遺跡群 友田遺跡群は田和山遺跡群の北東に隣接し、弥生時代後半の土墳墓27基と墳丘墓5基のほか、四隅突出墳丘墳と呼ばれる特殊な墳墓、さらには古墳時代の前期的様相をもつ17基の古墳群やその後の時代に作られた古墳群も同時に発見されている複合遺跡です。

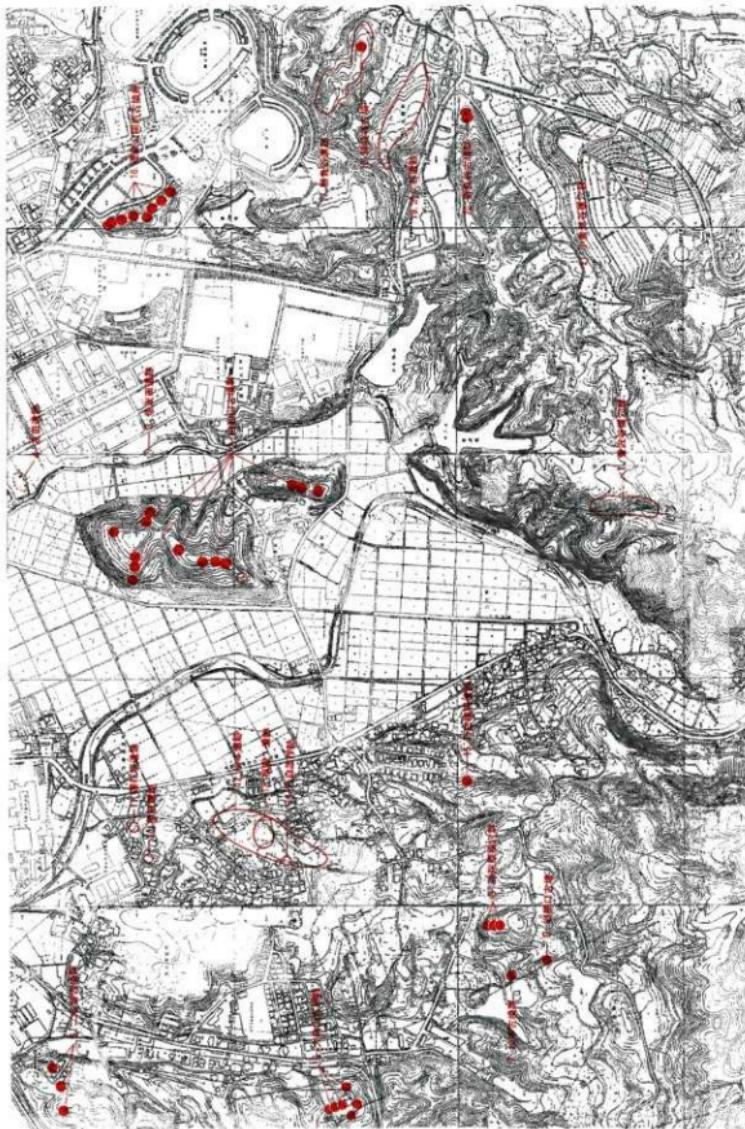
田和山遺跡群 田和山遺跡群には十数か所の古墳と住居跡があるらしいことがわかっています。このうち田和山1号墳については平成2年に発掘調査を実施しましたが、古墳の主体部に長さ2.4m、幅1.7mの横穴式石室をもつ、全長20mの前方後円墳であることが判明しました。

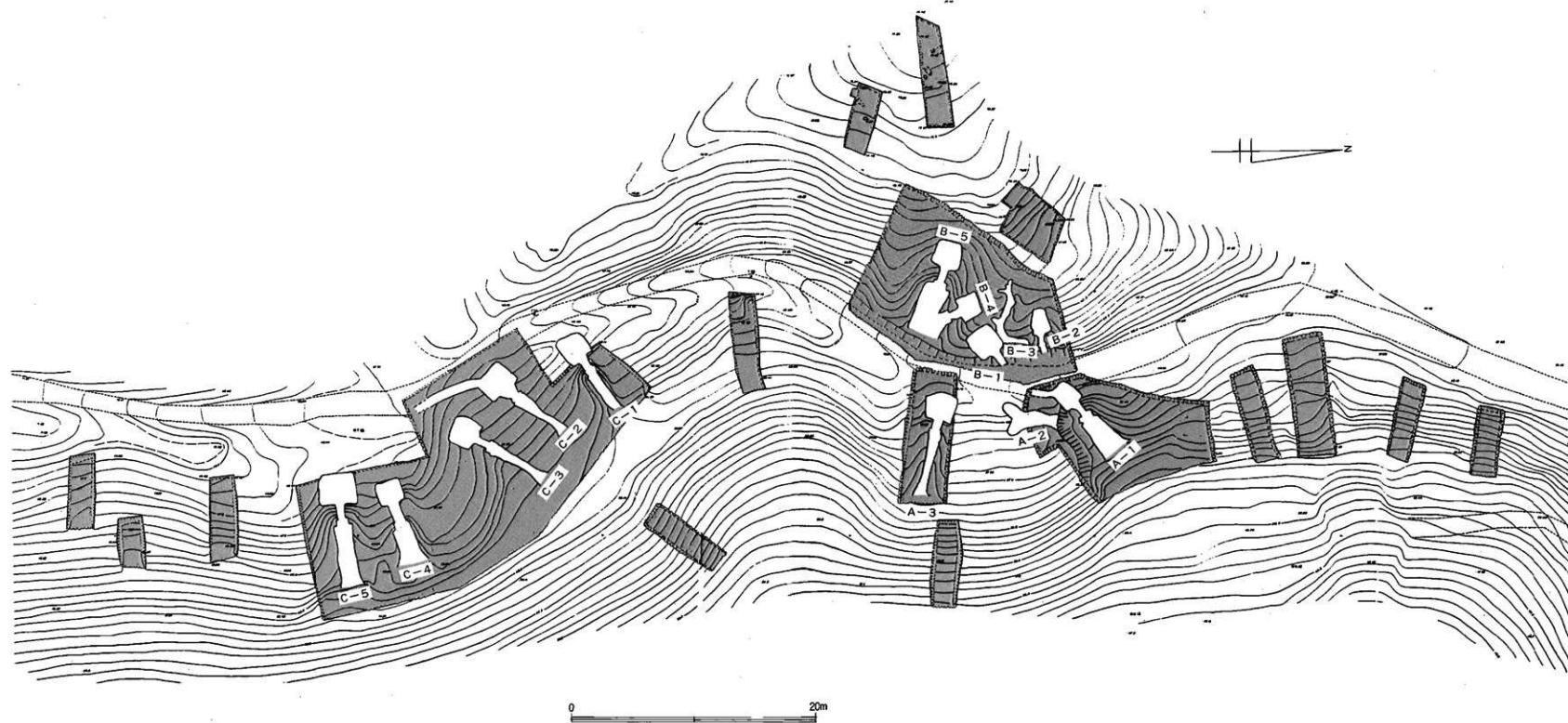
乃木二子塚 最後に乃木二子塚古墳に到達します。乃木二子塚は全長38mの前方後方墳で島根県の指定史跡になっています。昭和56年の発掘調査では幅3m余り、深さ0.5m以上の周濠や須恵器の高杯形器台の破片が出土しています。

下沢遺跡 乃木二子塚の周辺には石築等が出土し縄文時代の遺跡ではないかと考えられている下沢遺跡があります。昭和55年・昭和56年の2回にわたり周辺の発掘調査を実施しました。その調査では黒曜石製の石築やその石屑が発見されていますが、土器や遺構は発見されませんでしたので遺跡の詳細はまだよく判っていません。

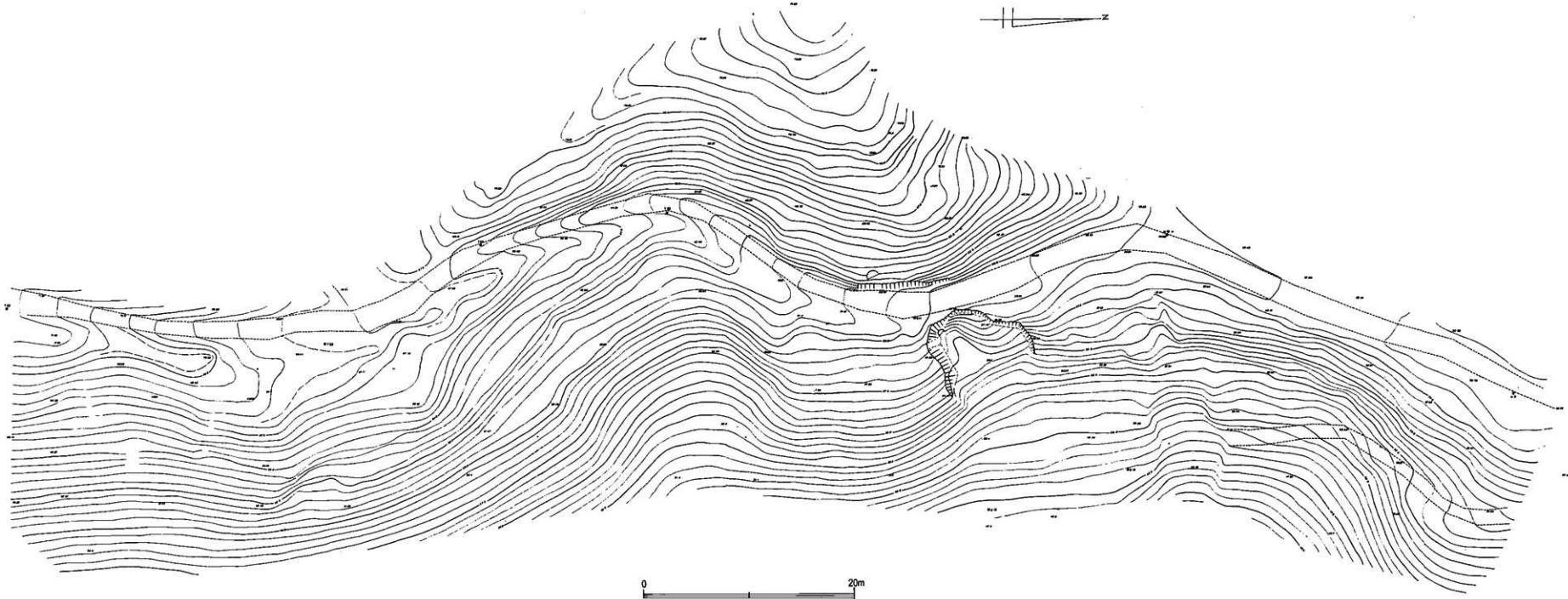
このように、乃木地区には縄文時代から古墳時代に至る限られた時代でもたくさんの遺跡がありますが、同じようにたくさんの遺跡が集中している東の大庭地区と、北に隣接する法吉地区の接点として、菅沢谷横穴群はたいへん重要な場所にあると言えます。

第1図 周辺の遺跡分布図





第3図 調査成果図



第2図 調査前測量図

3. 発掘調査の概要

(1) A-1号横穴墓

遺構 最初の分布調査でその存在が確認された横穴です。あとに述べるB-1号横穴墓と同じく羨門が開口していて玄室(遺体を置いた部屋)内を覗くことが出来ました。この横穴は羨門(横穴の入り口)から玄門(遺体を置いた部屋の入り口)部分まで天井が崩れて玄室の中に多量の土砂が流入していましたが、羨門を閉塞している石積(閉塞石)や羨道の床面、玄室の平面形は当時のままの状態を保っていました。

天井の形は、中央が崩れていて当時の状況はわかりませんが、壁の立ち上がりから推測すると、丸天井型の横穴であろうと思われます。

横穴の羨門に向かう前部は、掘りはじめの幅が2.93m、羨門付近で1.76mを測り、長さは4.16mあります。羨門は幅1.1~1.31m、羨道(玄室につながるトンネル)の長さは1.0mあります。羨門も羨道も上部は崩れていますので、高さを測ることは出来ませんでした。羨道は幅0.74mあります。玄室の奥行は2.40m、幅は1.87m、高さは1.14mあります。玄室の天井は丸く、ドーム形に造られています。玄門はこのドーム形の玄室の側面に設けられていますので、正式には丸天井形妻入横穴墓と呼ばれる形式です。

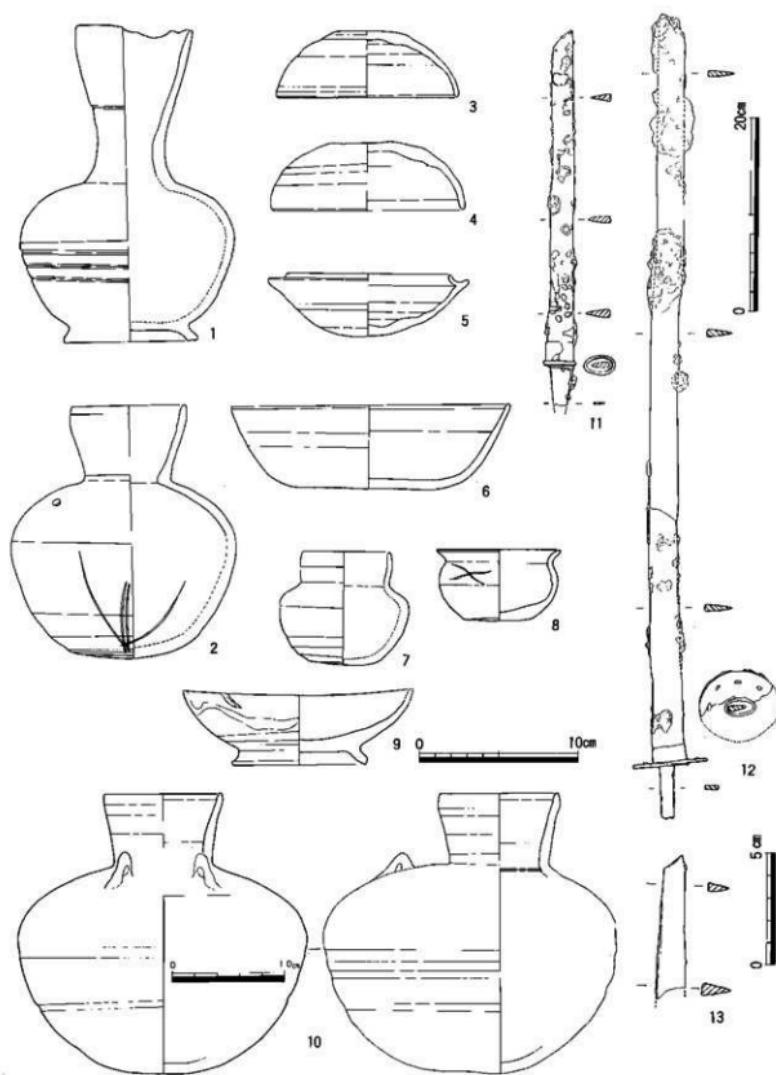
遺物 平成3(1992)年に行った試掘調査で、閉塞石のすぐ内側の羨道部分に台付長頸壺(だいつきちょうけいつぼ)と短刀が置いてあるのが判っていました。本年度の本格的な調査では、まず閉塞石のすぐ前で大型の平瓶(へいへい)と碎けた須恵器質の高台付碗(わん)が1個ありました。羨道内には昨年の試掘調査で発見した台付長頸壺と短刀のはかに、土師器質の深型の碗もありました。

玄室奥壁に向かって、左手には、30×20cmの石が2個置かれていただけでしたが、右手には遺物がたくさんありました。出土した遺物は、平瓶1、小型壙(かん)2、坏身(つきみ)4、坏蓋(つきふた)1、直刀(ちょくとう)1、刀子(とうす=小刀)片1でした。平瓶は、最も玄門よりにあつたものです。小型の壙は、口径7.3cm、器高4.6cmのもので、胴部にX印があるほか口縁の一部を打ち欠いています。

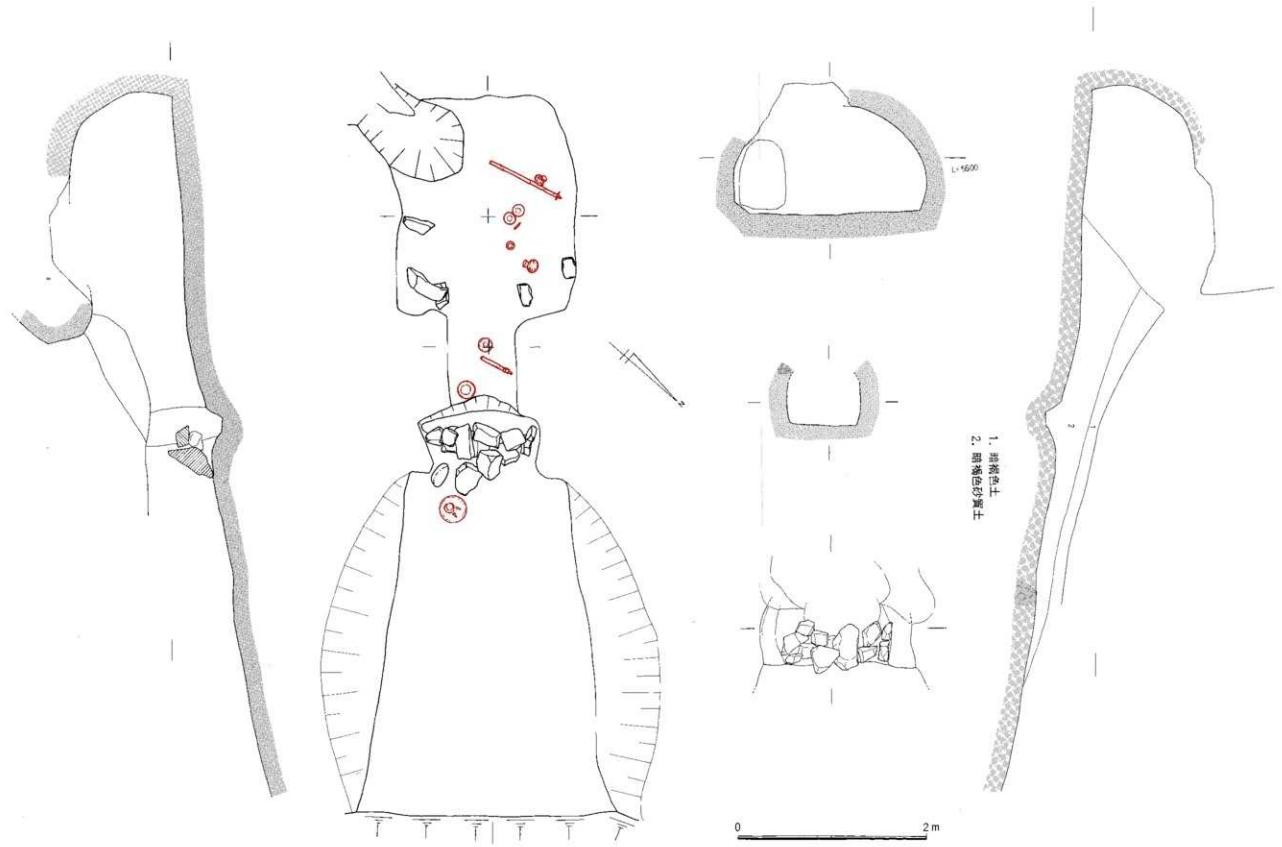
前部の羨門近くで出土した大型の平瓶は、他に類例がないものです。胴部の直径26.3cm、器高25.7cm。頸部は中心から数cmずれている程度で、肩部の広い方2か所に平行するように径0.7cm、長さ4.5cmの紐状の胎土を当てて把手としています。直刀は柄の部分は残っていませんでしたが、刀身部分だけで80cm近くもあるりっぱなものでした。出土した状況から、柄の部分は盗掘されたものと推測しています。

(2) A-2号横穴墓

遺構 A-1号横穴墓の左上方に、A-1号横穴の前部の壁を削って幅0.8m、高さ1mほどの羨道状の横穴が掘られていました。ここに留まった土砂を取り除きましたが、深さ1.50mほど掘ると二方向に分枝していることがわかりました。しかし、壁や天井の土砂はブロック状で、しかも横に剥離して崩れるために非常に危険な状態であり、遺物も全く出土しませんでしたので、調査を取り止めることにしました。



第4図 A-1号横穴墓出土遺物実測図



第5図 A-1号横穴墓実測図

遺物 美道の入口の埋土中から須恵器の壺あるいは小型壺の口縁部と思われる破片が出土していますが、堆積土中の遺物であり、この遺構に伴うものか断定できませんでした。

(3) A-3号横穴墓

遺構 試掘トレーンチを表土から2mほど下げ、さらに北側に2mほど拡張したところ、横穴の前庭部らしき落ち込みが認められました。軟質の粘土状で、地盤は剥離して落なし、玄室は完全に埋まっていました。試掘調査では前庭部を共通にして二方向に別れた2穴の横穴ではないかと推測していましたが、本格的に調査を行ったところ、これは盗掘孔で、その1mほど下に本物の羨門がありました。

羨門は2段の石を使って閉塞してあります。盗掘孔はこの羨門上部から合計3か所に、玄門上部に向かって開けられていますが、真ん中の盗掘孔が玄室に貫通しているようです。

前庭部は堀り始めの幅1.38m、羨門付近で1.66mあります。羨門は、幅0.9m、高さ0.92mで平均20×20cmの石を使って完全に閉塞してあったものと思われますが、発見時には上部が玄室側に崩れていました。

羨道は、羨門部で幅0.67m、玄門部で0.95mあります。玄室は奥行2.60m、玄門側で2.60m、奥壁で2.35mあります。玄室の天井は崩れていますが、丸天井型妻入りの横穴であったと思われます

遺物 玄室内には土師質で丹塗りの高杯と脚付短頸壺、及び須恵器の壺蓋2セツトと高杯がありました。丹塗りの高杯は、口径14.3cm、器高は12.5～12.7cmあります。全体に水銀朱が塗布してあります。脚部の一部が故意に打ち欠いてありました。同じ土師質の脚付短頸壺は、口径8.0cm、器高12.7～13.0cm、胴部最大径12.1cm、脚部径7.8cmを測ります。これも、おそらく全面に水銀朱が塗布されていたのだと思われますが、口縁部の一部に残っているだけでした。これも脚部の一部に故意に打ち欠いてあります。口縁部と胴部に斜めの沈線文があります。

同伴した須恵器蓋壺の形状から6世紀前半から中頃に作られたものであろうと想像されます。

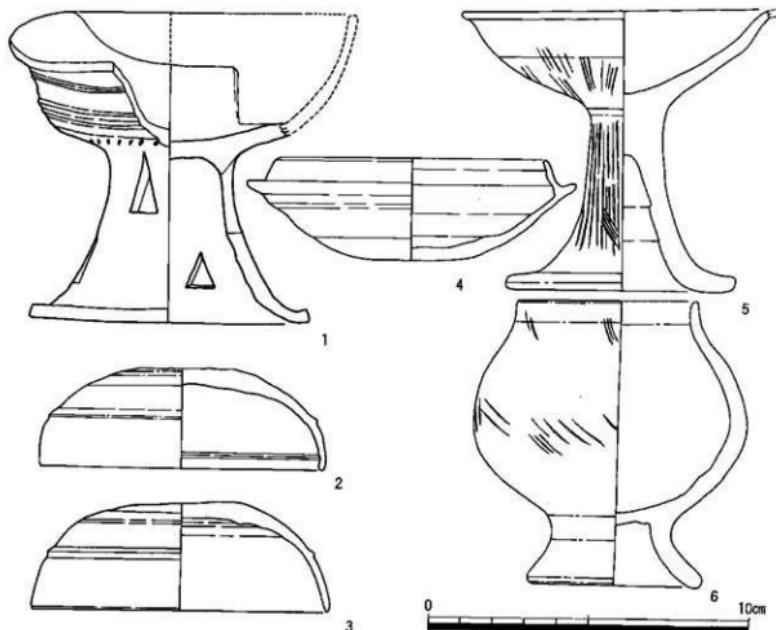
(4) B-1号横穴墓

遺構 当初の分布調査で発見された横穴のひとつです。B群の西側上部の狭い範囲の斜面に構築された横穴のひとつで、旧山道によって玄室の前半部が上部から削平されました。内部は露出していて、床面には数十cmの土砂が堆積していました。

羨門部は完全に破壊され、築成当初の状況はわかりませんでした。玄門から羨道部の床面がわずかに検出されましたが、それによると羨道の幅は0.76m、高さは推定0.9～1mあります。玄室床面の規模は奥行2.32m、幅は2.52m、高さは推定で1.32mあります。羨門は削平されているためわかりません。

床面を精査したところ排水溝や尻床等の施設はありませんでした。また内部も全体に凹凸があつて後世かなり搅乱されているようです。地元の人の話によると戦前にはこの横穴の中に自由に入って遊べたということです。

遺物 遺物は玄室奥で数片の須恵器蓋壺の小片があり、この蓋壺の特徴から7世紀初頭に造られたものと推定されます。他に大型壺の口縁片も検出されています。



第6図 A-3号横穴墓出土遺物実測図

(5) B-2号横穴墓

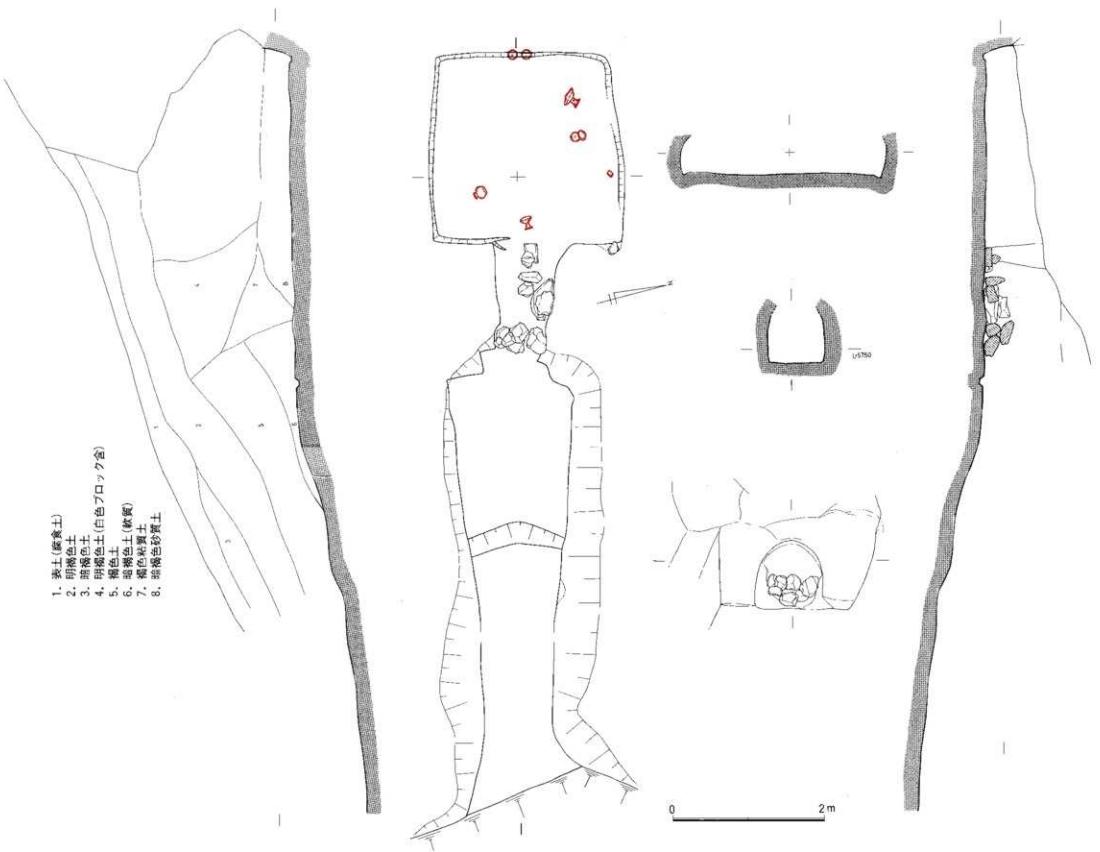
遺構 B-1号横穴墓の斜め右上方に羨道部が開口していました。羨門には閉塞石はありませんでしたが、幅20cm、深さ12cmの溝が切られているので、木板によって簡便に閉塞したものと推察されます。

玄室は横穴群中最も小さく、奥行2.12m、幅1.5m、高さ1.26mあります。羨道の幅は0.7mを測ります。羨道は閉塞部分まで0.8m、幅は0.7mあります。羨道部の天井は崩れているので、高さはよくわかりませんでした。

遺物 玄門付近には坏身が伏せた状況で置かれていました。内部中央に鉄鎌（鉄製の矢じり）が3本と、人骨らしい小骨片が残っていました。玄室の四周には排水溝が切られ、中央に屍床らしき高まりが認められますが、はっきりと断定は出来ませんでした。

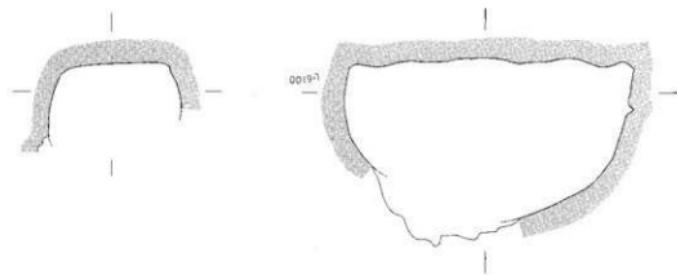
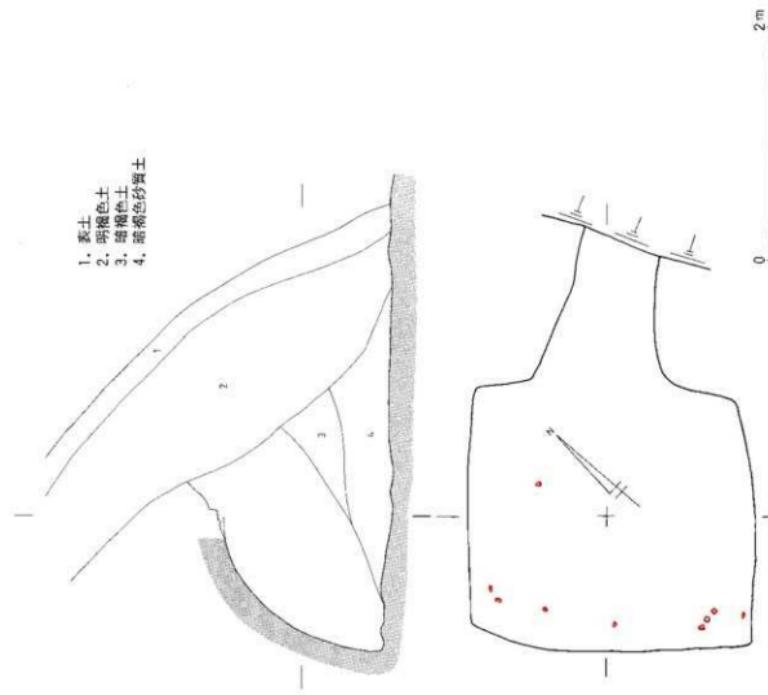
(6) B-3号横穴墓

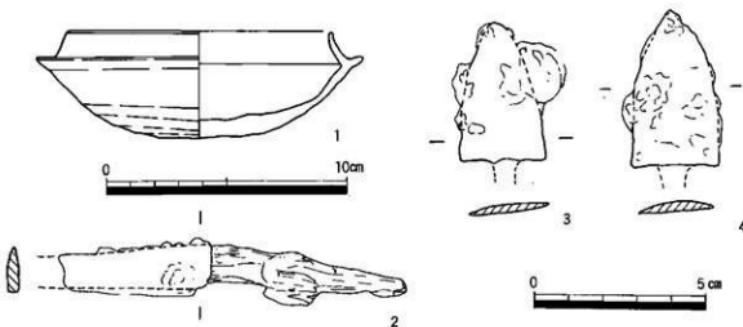
遺構 B-2号横穴墓の左上方、B-1号横穴とB-2号横穴の中間の上部に作られた横穴です。



第7図 A-3号横穴墓実測図

第8図 B-1号権穴墓実測図





第9図 B-2号横穴墓出土遺物実測図

羨道正面は地山だったので最初は地下式の横穴ではないかと思われました。ところが実測を段階でもう一度精査したところ、正面向かって左手（南）に幅40cmほどの細い溝状の遺構があるのがわかりました。

この溝状の遺構はB-1号横穴の真上から北西に向かって掘り込んでいますが、途中で約30度ほど北に曲り、ここから羨道らしく幅広くなって、ほぼ西に向かって掘り進み玄室に向かいます。しかし、玄室は掘り始めた初期の段階で中止しています。この玄室は三方向に掘り進んでおり、掘り方の手順が明らかで興味深いものです。

羨道に向かうこの細い溝状遺構を観察すると、この溝を直行するようにさらに細い溝を作るなど羨門部の閉塞機能を造ろうとした形跡もありますので、これも羨門と前庭部を造りかけて中止したと考えると納得出来るように思われます。

以上のことから、この横穴は①まず地山の適切な部分を垂直に切り取り山斜面に羨道幅の竪穴を穿つ程度の平坦地を造る。②次に約45度下方に向かって竪穴を掘り、玄室を造れる程度の深さまで地中に入ると今度は水平に羨道を掘り進む。③最後に玄室と羨門、前庭部を両方向同時に整形しようとした、と考えられるのです。

まことに奇異な方法のように思われますが、山頂に近いという地形的な制約を除いて横穴の体裁を整えるためには、このような無理な方法しか無かったのであろうと推察されます。しかしこうした方法はやはり無理だったのか、あるいは社会的な変革などの原因によって、結局途中放棄してしまったもののように思われます。

遺物 遺物は羨門の閉塞にしようとした溝状遺構の中に生焼の須恵器の平底碗が伏せた状態で検出されています。

(7) B-4号横穴墓

遺構 B-1号横穴の南側、B-5号横穴のすぐ北側に隣接する横穴です。羨道は落盤し、玄室内には土砂が多量に堆積していましたと埋まっていました。前庭部には小型の蓋が数セット供獻されていましたが、この直上に椎の大木があり、その木根に絡まって出土したので、原状はよくわかりません。

羨門は2段の石で閉塞してあります。木板でふさいだ上にこの石で固定したものようです。羨門の幅は1.15m、高さ推定1.00m。玄室は奥行1.92m、幅は玄門側で2.15m、奥壁で1.92m、高さは推定1.30mあります。

遺物 玄室床面には、坏蓋3、坏身3、小型壺1、高台付坏1、鉄製鍼先金具（くわさきかなぐ）がありました。鍼先金具は、U字形をしており、内側を二重にしてすき間をあけ、ここに木製の身を挿入したものと思われます。大きさは長さ30cm、幅は25cmほどありました。

(8) B-5号横穴墓

遺構 B-4号横穴の羨門のすぐ南側に隣接して前庭部があり、2mほど奥に羨門の閉塞石が残っていました。閉塞石は2段だけ残っていましたが、他に閉塞に使用された石はありませんでしたので木板で閉塞し、これを石で止めていたものようです。前庭部の切り合いの状況から、本横穴墓が造られた後にB-4号横穴が造られたと考えられます。上部の巨大な地盤のブロックが落下して内部を完全にふさいでいましたが、これを取り除くと、暗茶褐色のやわらかな堆積土が数十cmありました。これがクッションになったものか、遺物はすべて完全な状態で残っていました。玄室の奥壁もほぼ完全な状態でした。玄室の玄門寄り中央に、頭骨片と思われる骨片が認められましたが、ほとんど粉状で取り上げることは出来ませんでした。

玄室は奥行2.35m、幅は玄門側で2.65m、奥壁で2.20mあります。高さは、奥壁部分から推定すると1.4m前後あったものと思われます。羨門は、幅1.15m、高さは推定1.0m、羨道の長さは1.2m、幅は0.65m、高さは0.88mありました。玄室の右手には平たい石が列状に奥壁に向かって並べられています。頭骨片もこの石の間にありました。石の並べられた状況や、玄室内で鉄の角釘が2本発見されていることから、この石の上に木棺を安置していたものようです。

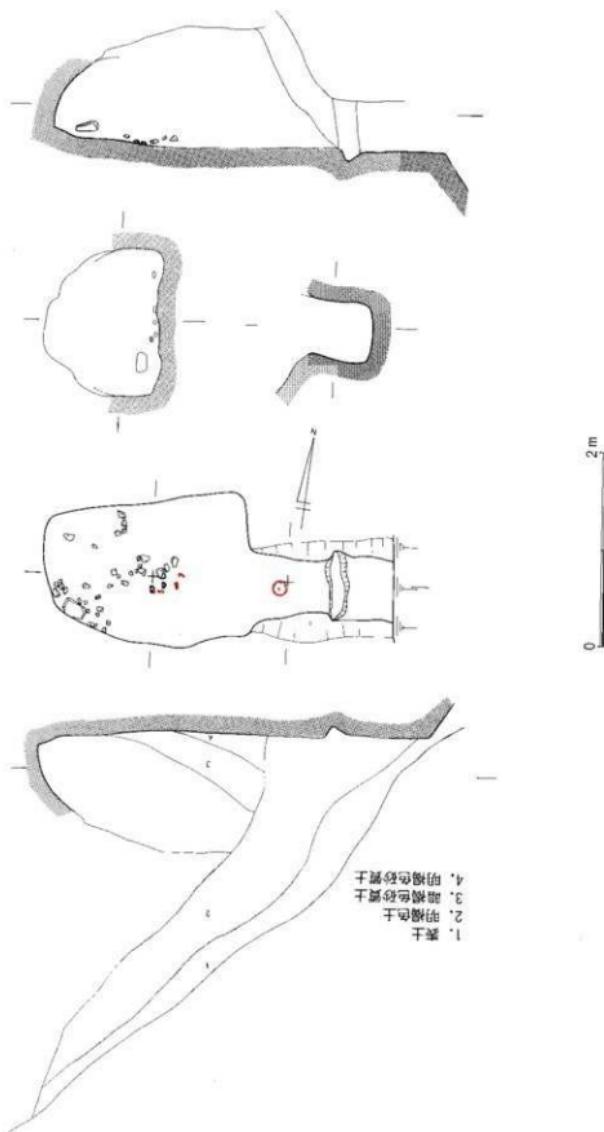
遺物 内部には、坏身3、坏蓋4、高台付坏1、輪状つまみの付いた蓋、壺、耳環2、鉄角釘2、直刀がありました。直刀は身の長さ75cmを測りますが、A-1号横穴墓で発見された直刀と同じように、柄の部分がありません。出土状況から見ると、この横穴も盜掘されたように思われます。

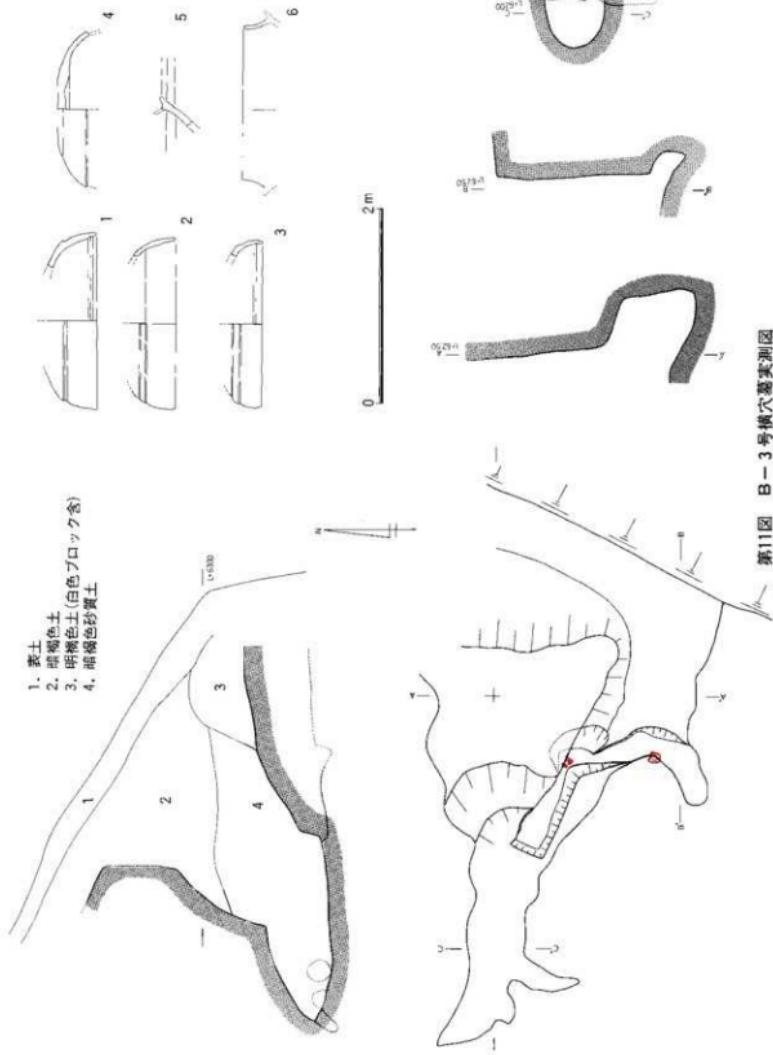
(9) C-1号横穴墓

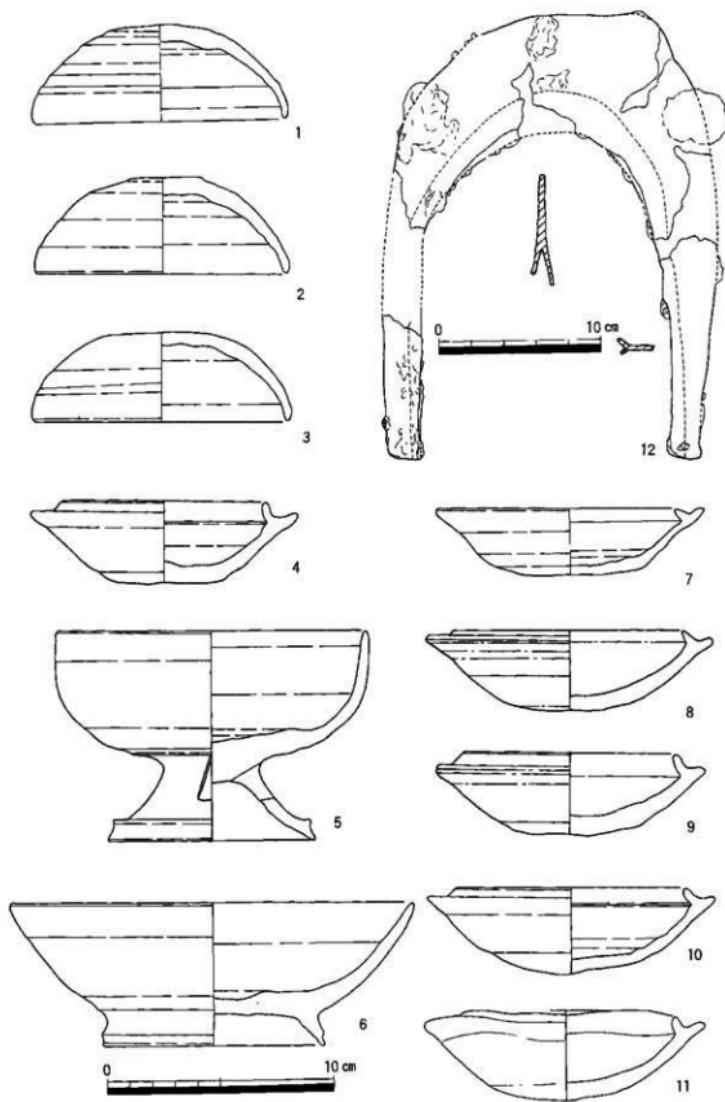
遺構 C-1号横穴墓は、菅沢谷横穴群の所在する丘陵の谷斜面南奥に位置する5穴の横穴群のうち、最も北側に位置する横穴墓（B群に統く横穴）です。

玄室は天井部と側壁との界面が明瞭ではなく、丸天井型に近い形状をしています。規模は奥行2.55m、幅2.35m、高さ1.37m。羨道は長さ0.98m、幅0.93m高さ0.91m。四周と中央に排水用の溝があ

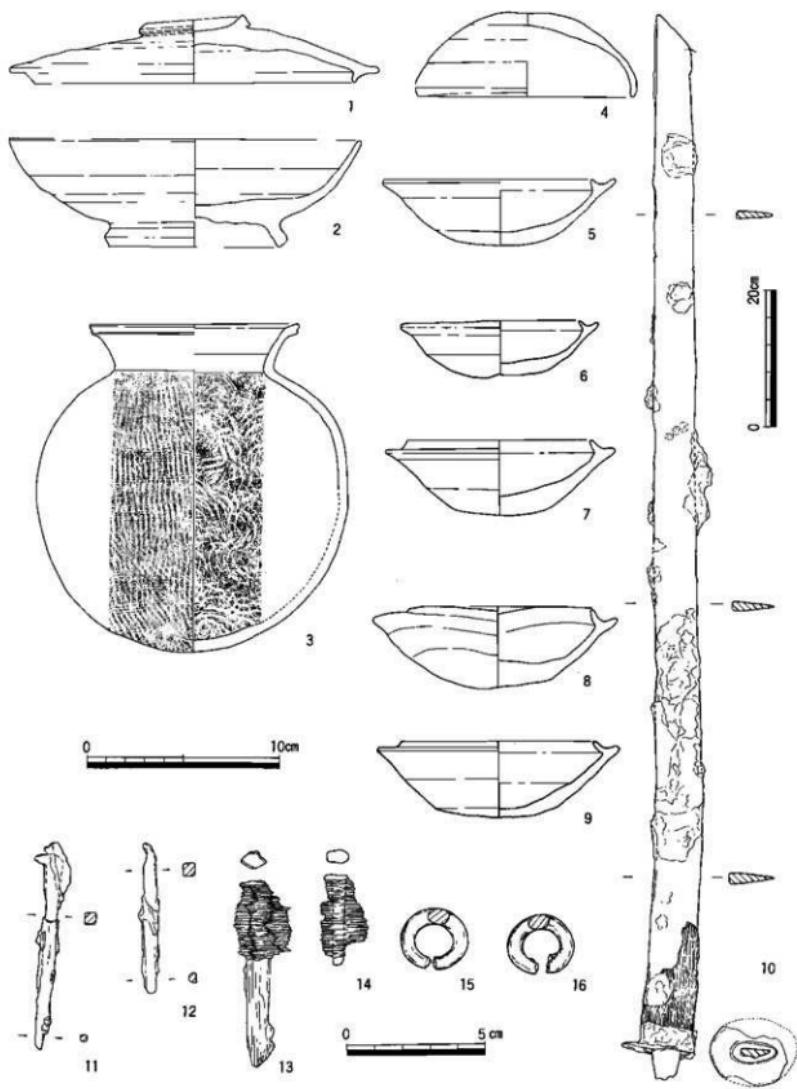
第10圖 B—2號樁穴墓測量圖







第12図 B-4号墓出土遺物実測図



第13図 B-5号横穴墓出土遺物実測図

ります。中央の溝は羨道中心を通り、そのまま羨門に抜けています。天井部の一部が崩落していますが、ほぼ完全な形で残っていました。

玄室左側の屍床には2体の人骨が頭位を反対にして下肢骨を上下に交差する形状で埋葬されています。奥壁に頭位を置く人骨（第2号人骨）は頭骨が形状をとどめないまでに碎けていましたし、残った骨も触れただけで粉状に崩れてしまいました。逆に玄門側に頭位を向ける人骨（第1号人骨）は下顎骨がほぼ完全な状態で保たれていて、頭骨の形状が推定出来るほど良好な状態で残っていました。

こうした骨の遺存状態から、これら2体の埋葬時期は少しがれないと考えられます。玄室奥に頭位を置く人骨は推定年齢25歳前後の男性と思われますので、もう1体は少なくとも5年ほど後に埋葬された30歳代の女性と考えられます。玄室右側の人骨は部位を特定するような骨は全く残っていませんでしたが、乳臼歯らしき歯牙が残っているのが認められますので、10歳までの幼児が埋葬されている可能性もあります。この横穴が構築された直後から、同じ家族や親戚の中で死者が出るたびにこの横穴に埋葬したと推測されます。

遺物 男性の頭骨周辺には、横瓶と長さ80cmの直刀、壙及び鉄鎌6本が副葬されていました。女性頭骨の周辺には壙蓋4セットと大型の提瓶及び鉄鎌3本が検出されました。右側の屍床には玄門側に枕とした壙蓋2セットと提瓶2個、奥壁に壙がありました。鉄鎌は四隅の溝の中から2本、奥壁側に2本、鹿角製の鎌が1本検出されました。これらの鎌は原位置から相対的にずれていると考えられますが、天井の崩落による土砂によって跳ねられた場合や、遺体が腐敗する過程においても移動する可能性があると思われます。それは人骨の位置がずれていることからも想像されます。

女性骨の頭部付近にあった大型提瓶は、本横穴群の北側に所在する田和山1号墳の玄室内にあった大型提瓶に、類似しています。この大型提瓶は島根県では他に類例が見られないものですので、田和山1号墳とこの横穴群の親密な関係が想定できると思います。

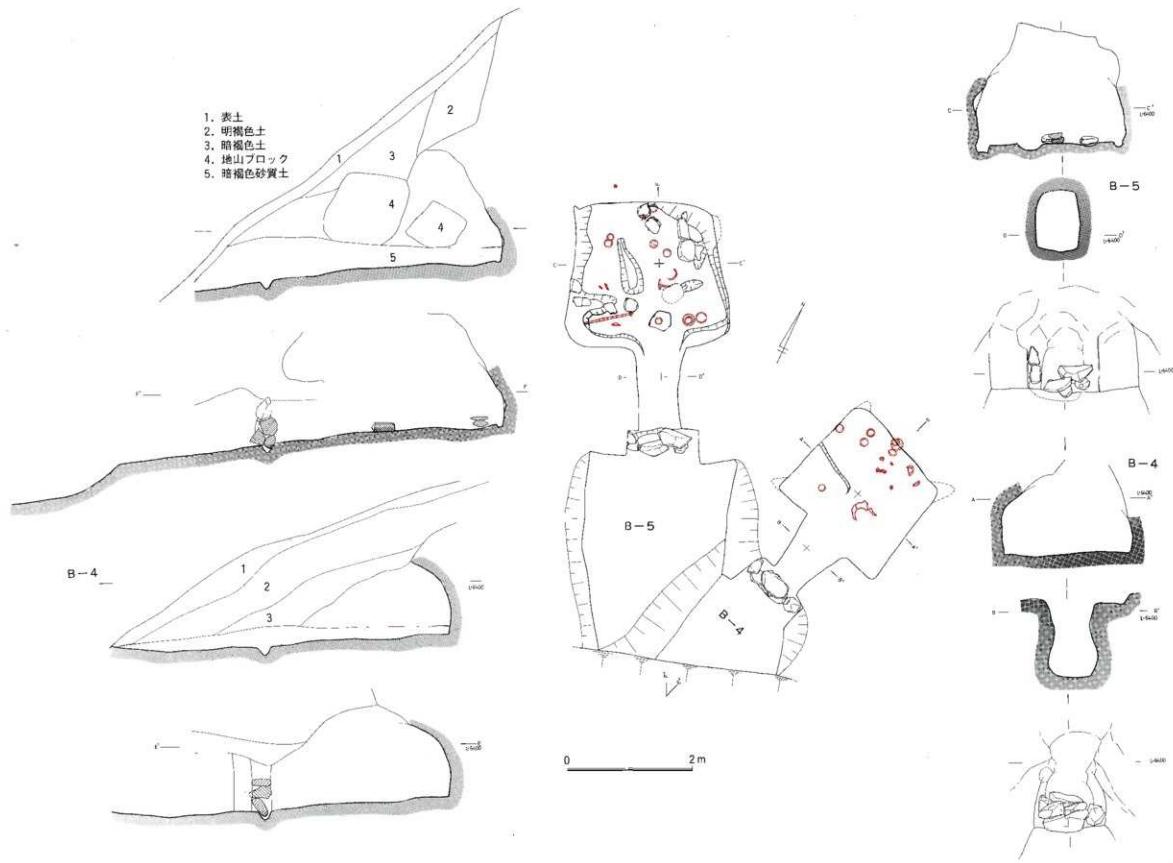
蓋坏の特徴から見ると、本横穴は6世紀後半（西暦550年以後）に構築されたものであろうと思われます。

⑩ C-2号横穴墓

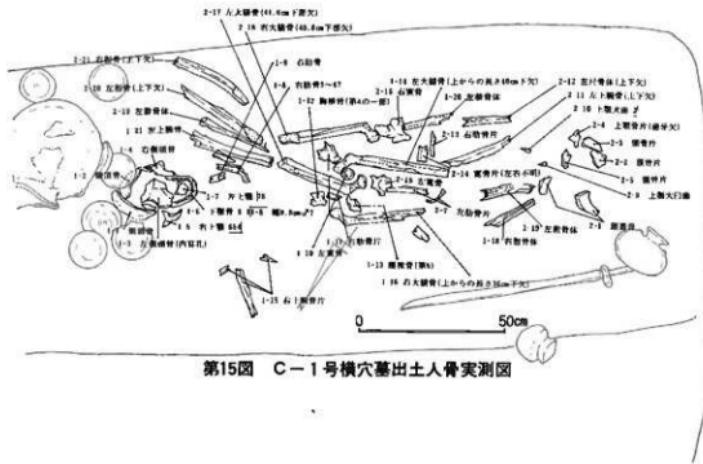
遺構 C-2号横穴墓はC-1号の南側に隣接する横穴です。前庭部の床面はC-1号横穴より2m近くも高い位置から掘られています。羨道から玄門及び玄室の半分ほどが崩壊し、流入した土によって完全に埋まっていたが、横穴内に堆積したと思われる土砂はありませんでした。尾根の高さはさほど変わっていないうえに、このC-2号穴と隣のC-3号穴の地山だけが砂岩質に変化していますので、おそらく掘り上げた直後に崩れてしまったようです。

当初の試掘トレンチの設定では前庭部を検出しただけで羨門部は確認出来ませんでした。トレンチを大きく尾根筋にまで拡張して、上部の土砂を排除しつつ羨門部の確認作業を行ったところ、それから10cmほど掘り進んだところで羨門を確認することが出来ました。

羨門の幅は1.5m、羨道の長さは0.9mあります。羨道入り口で0.85mあった幅が玄門で1.65mになります、ちょうど「じょうご」のように玄室に向かって広がっています。羨道部中央右寄りには排水溝が



第14図 B-4・B-5号横穴墓実測図



第15図 C-1号横穴墓出土人骨実測図

切ってあります。羨門入口には胸のC-3号横穴と同様に幅10cm、深さ30cmほどの溝があるので、これも木板だけで閉塞したものようです。

玄室の土砂を全て取り除くと、その大きさは奥行2.35m、幅2.88mありました。羨門から始まる排水溝は幅15cm、深さ5cmほどで、玄室右壁に平行に奥壁まで続いている、玄室右側をこの排水溝で区画して屍床としたようにみえます。人骨はありませんでしたが、この付近には厚さ7~10cmの暗褐色の粘質の土砂が堆積しており、出土した須恵器もこの土層内で検出されました。

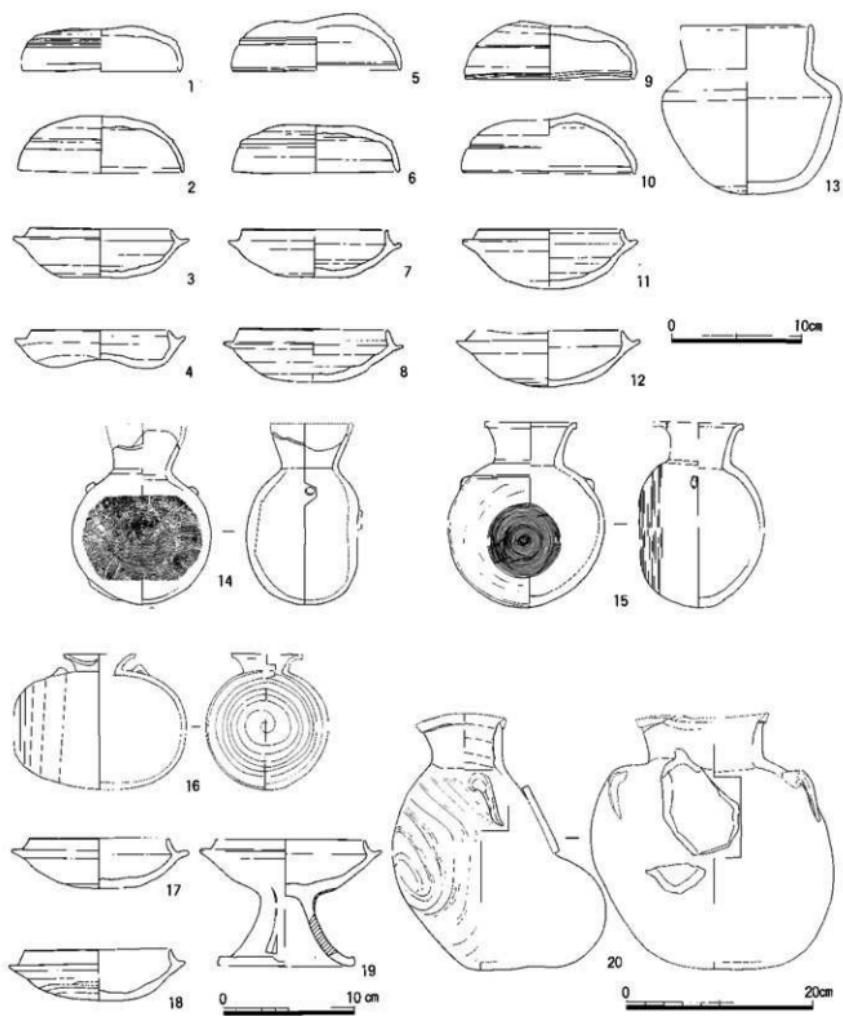
排水溝が右壁を意識して造られているために、左側は玄室全体の3分の2の空間が出来ていますが、遺物・遺構ともありませんでした。屍床等の埋葬施設を造らなかったために空間が生じたものと推定しています。

玄室の奥壁左侧隅に高さ0.80m、幅0.75mの第二の羨道状の横穴が穿たれていました。前述した左側の空間はこれを意識して前庭部的な性格を持っていることも考えられます。

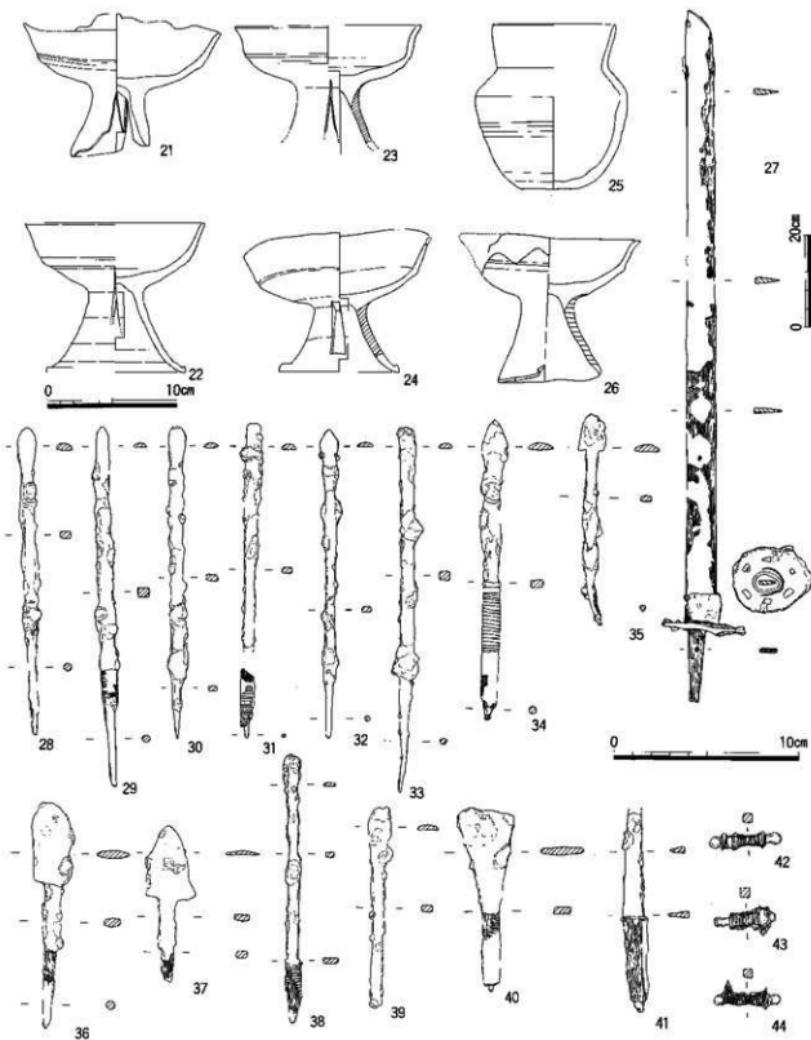
この羨道状の横穴は、幅と高さは変わらぬまま、胸のC-3号横穴墓の玄室の裏側を通り尾根筋にまで達していました。長さはこの時点では4m余りあり、さらに奥に続いているようです。遺物は無く目的も不明で、なぜこのような横穴が必要であったのかよくわかりません。

遺物 前庭部床面上では遺物は全く検出していませんでしたが、前庭部を覆う黒色の堆積土中からは瓦片が多く出土したほかに、完形品の环身が1個発見されました。これがあるいは前庭部に供獻されていた遺物かもしれません。

玄室内には右壁屍床部分に环蓋1セツと塔がありました。玄室中央奥には环身が1個ふせて置かれていました。右壁奥に玄室床面から30cm以上も浮いて耳環が1個検出されました。追葬時か盗掘時か、または玄室奥に新たに横穴を掘る際に原位置を動いたものようです。



第16図 C-1号横穴墓出土遺物実測図(1)



第17図 C-1号横穴墓出土遺物実測図(2)

① C-3号横穴墓

遺構 C-2号横穴墓の南に隣接しています。C-2号横穴と同様に羨道、玄室とも完全に崩れています。土砂は玄室を完全に押し潰し、さらに周辺の地山も一緒に崩れて大きく穴があいていました。トレーナーを尾根筋にまで大きく拡張し、崩落した4mに及ぶ上部の土砂を取り除き、玄室部分を平面的に露出させました。

玄室の規模は奥行2.45m、幅2.70mで高さはわかりませんでした。玄室中央には排水溝が掘られていましたが、玄門の手前で自然消滅しています。床面は右壁中央から玄門にかけて幅10cmの亀裂が入っており崩壊によって地表面も大きく損傷を受けたようです。羨道は幅0.70cm、長さ1.0mで、羨門入口は幅約10cmの閉塞用の溝が切ってあります。その幅から考ると、木板による簡易な閉塞と思われます。玄室内には須恵器の蓋片とともに人骨らしき骨片が散乱していましたが、かろうじて大腿骨らしき形状が認められるものもありました。これらの骨片は床面全体に散乱していましたので、この横穴でも複数の埋葬が考えられるようです。

羨門は幅1.0m、高さ推定0.8~0.9m、前庭部右側から玄室に向かって大がかりな盗掘孔があります。玄室には到達したようですが、その堆積状況からみると、盗掘された時点では既に崩落していた後のようにです。

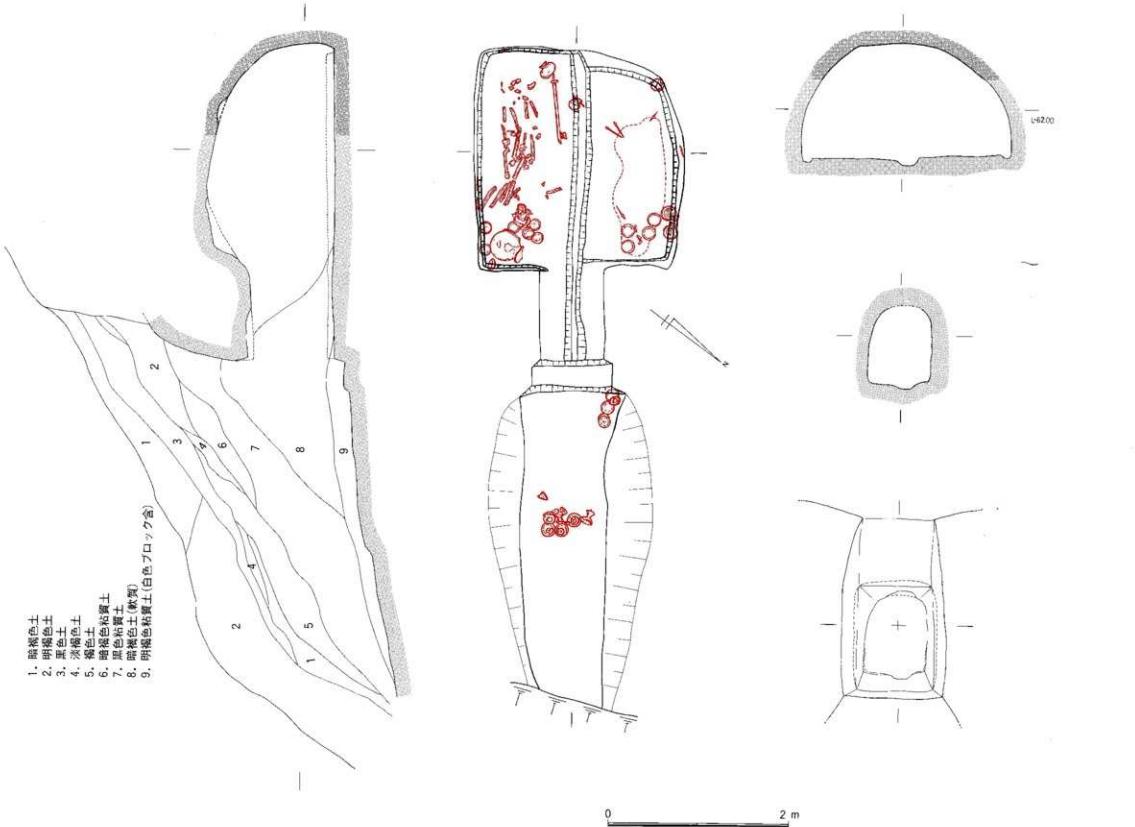
遺物 玄室内に人骨片とともに环身5個、环蓋4個と刀子片らしき鉄製品が1個検出されました。蓋片の形状からすると、C-1号・C-5号横穴墓のそれよりも幾分小振りでC-2号穴のものに近いのです。造られた場所や遺物の特徴から、この2穴はC群の中でも更に新しい時期に作られたものかもしれません。

② C-4号横穴墓

遺構 C-3号の南に隣接する横穴です。羨道上部は表土から3mほど下にあります。羨門は極めて広く、幅は1.10mあります。羨道の長さは1.55m、高さは0.75m。玄室の奥行は1.90m、幅は2.10m、高さは1.12mありました。玄室内には土砂が40~50cm近く堆積していましたが、玄門左側から奥壁右側に向かい中央斜めに人骨片が散らばっていて、その付近は堆積土が20cm程少なく、しかも均一でした。こうした状況から、木棺が斜めに安置されていた可能性が大きいのではないかと思われました。石棺はその場である程度加工することができる所以玄室の大きさに合わせることが可能と思われるが、逆に木棺は作られた状態のままで運び込まれその場で加工することが出来なかつたため、斜めに置かざるを得なかつたとも考えられます。

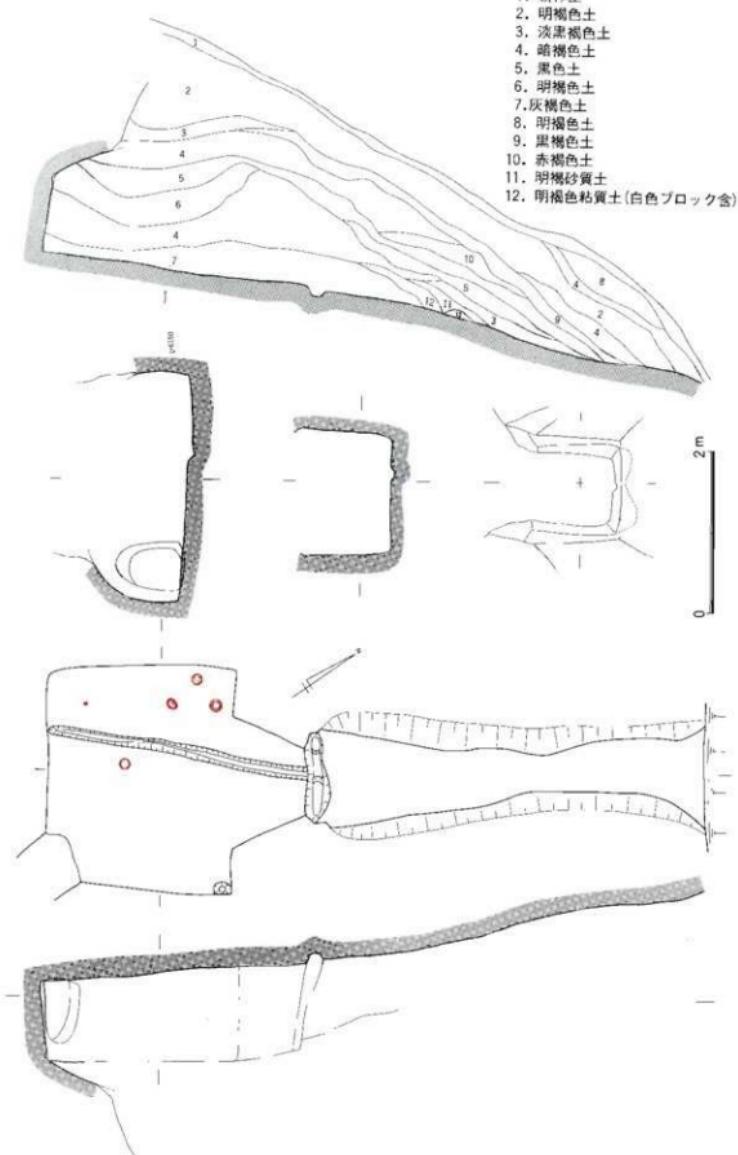
玄門付近に頭蓋骨と大腿骨が寄せて置いてありました。玄門部中央には少し浮いた状態で下顎の歯牙が検出されました。こうしたことから本横穴の人骨は完全に集骨されていて、しかも2体分の骨があるのではないかと推測されます。遺存状態のよい骨は壮年後期の(30~40歳)の男性骨で身長160~165cmであると思われます。

遺物 長頸壺が1個だけ、玄室のほぼ中央で人骨に沿うように置いてありました。他には遺物はありませんでした。

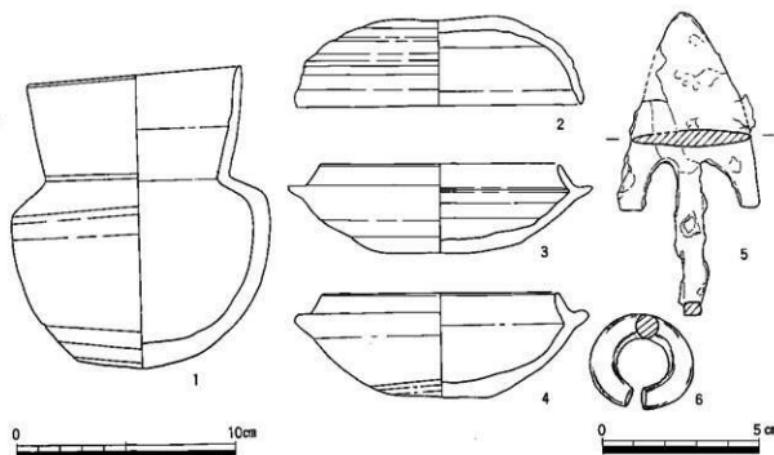


第18図 C-1号横穴墓実測図

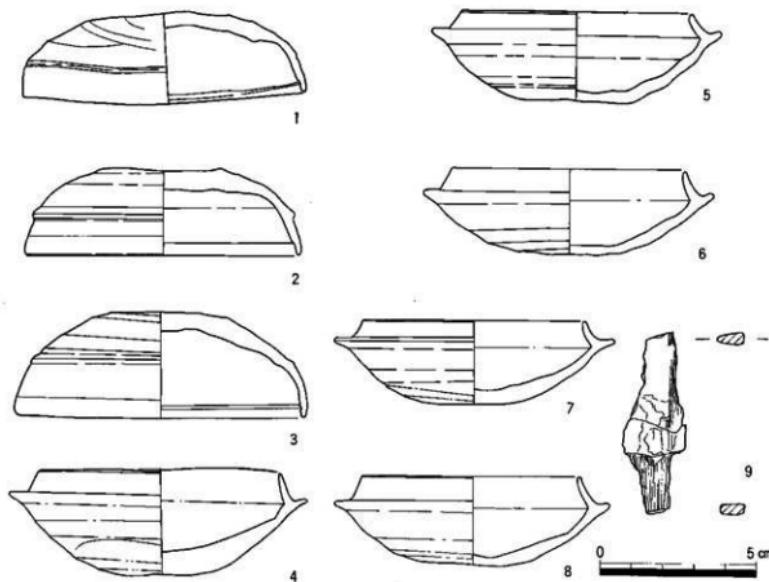
1. 耕作土
2. 明褐色土
3. 淡黑褐色土
4. 暗褐色土
5. 黑色土
6. 明褐色土
7. 灰褐色土
8. 明褐色土
9. 黑褐色土
10. 赤褐色土
11. 明褐色砂質土
12. 明褐色粘質土(白色ブロック含)



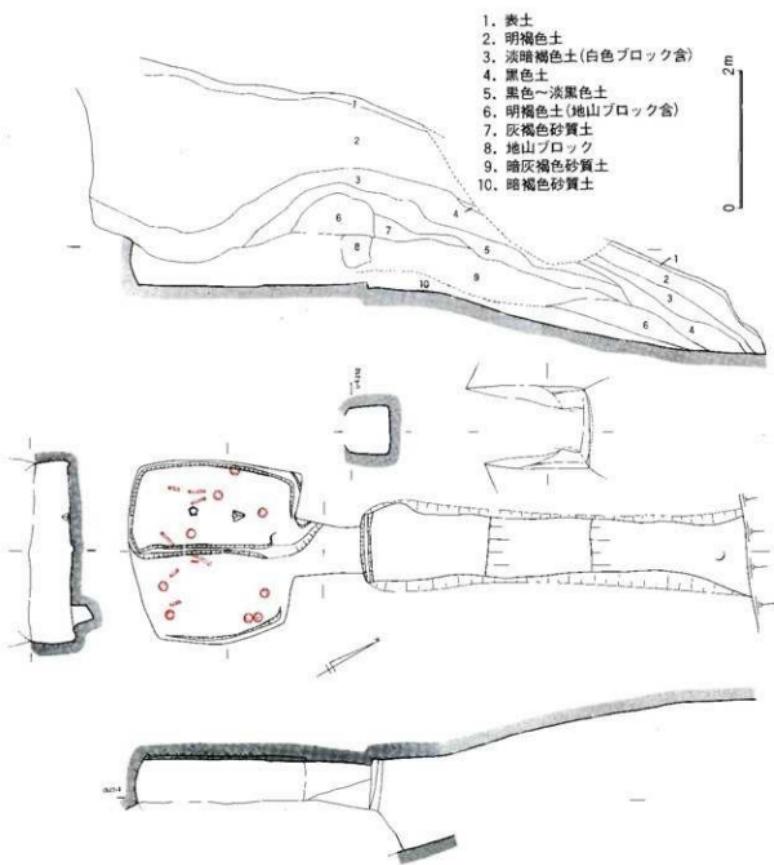
第19圖 C-2号横穴墓実測図



第20図 C-2号横穴墓出土遺物実測図



第21図 C-3号横穴墓出土遺物実測図



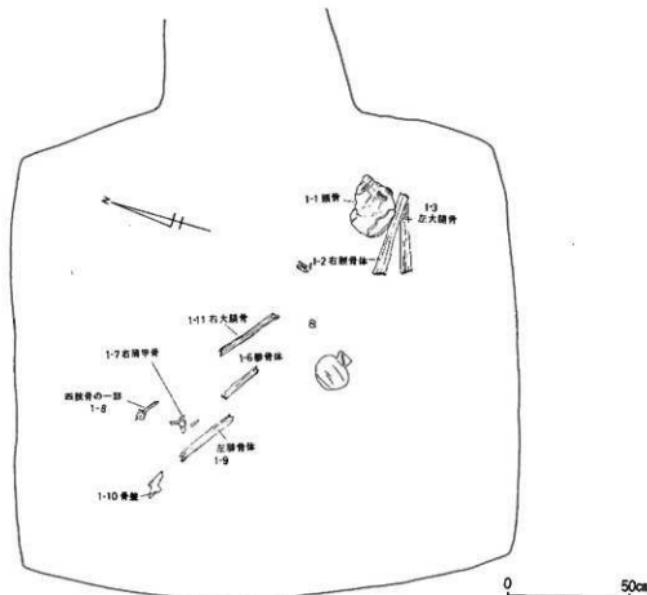
第22図 C-3号横穴墓実測図

(3) C-5号横穴墓

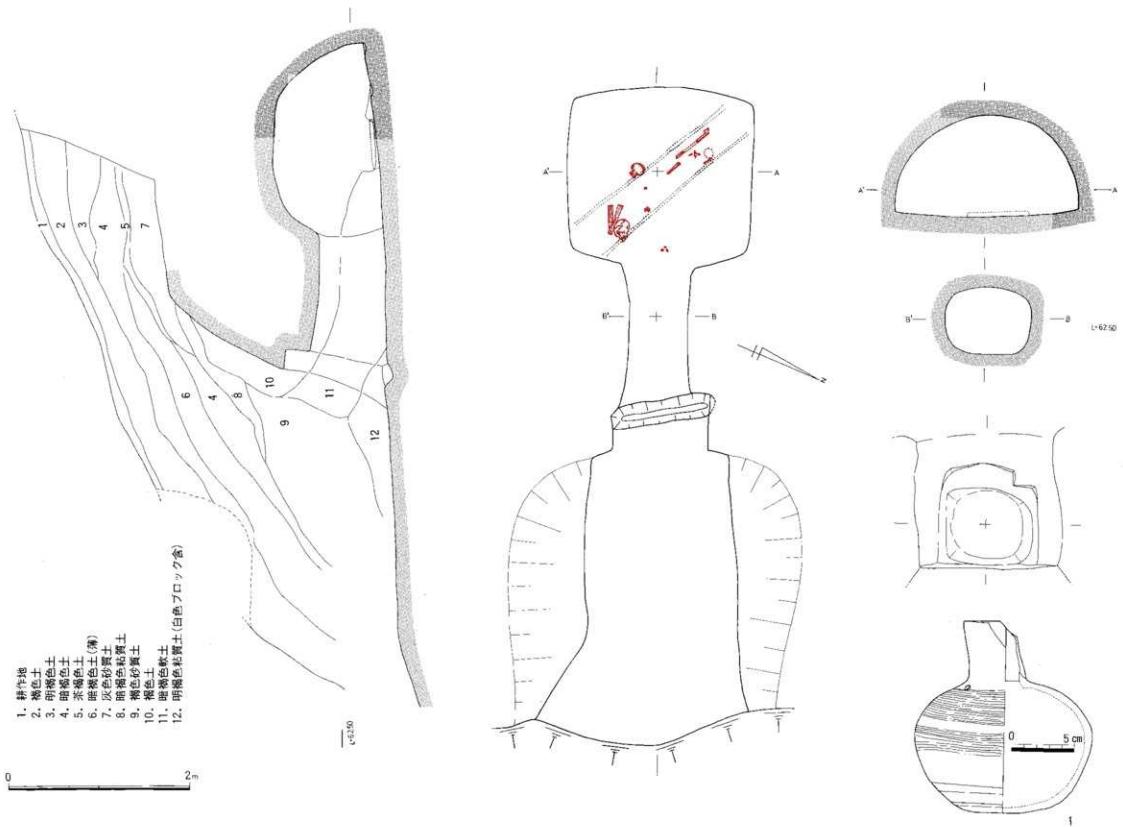
遺構 C-4号横穴墓の南に隣接する横穴です。菅沢谷横穴群中最も谷奥南側に位置し、玄室の規模も最も大きい横穴でした。羨門は表土から約4m下で発見されました。羨門には左側に寄って、幅40cm、高さ70cmの白粉石（玄室内の石棺と同じ石材）が1枚残っていました。これは閉塞石としての役目は果たしていないので、木板による閉塞を安定させたものと考えられます。玄室は天井部と側壁との界面が明瞭ではなく、丸天井型妻入りと呼ばれる形式です。玄室の規模は奥行2.45m、幅3.10m、高さ1.55mあります。羨道は長さ1.25m、高さ0.9mを計ります。玄室右側には流紋岩質凝灰岩^(注1)で作られた石棺が安置されています。左側は地山が5cmほど削り出してあり、それを須恵器大甕の破片でまんべんなく敷き詰めた、所謂須恵器屍床と呼ばれる作りです。

石棺は蓋石2枚、側石が左右に3枚ずつ、床石6枚と前後的小口石の合計13枚で構成されています。石棺の組合せ順序は、床石を敷きその周囲に小口石を置き側石を置いて最後に蓋石を置いたものです。蓋石の1個は厚さ8cm、長さ120cm、幅80cmあります。調査の終わった後にこの蓋石を取り出しましたが、縦に起こして引くと計ったように羨道をすりぬけることが出来ました。

棺内には左右脛骨が両端を欠いて1本ずつ残っていましたが、他はすべて粉状に砕けていました。



第23図 C-4号横穴墓出土人骨実測図



第24図 C-4号横穴墓実測図

これを第1号人骨としましたが、この人骨は身長120cm以下で、10~12歳前後の女性骨ではないかと推定されています。

石棺の外側のすぐ横には同じく玄門側に頭位を向けた第2号人骨があります。須恵器屍床には玄門側に向いた一体の第4号人骨が埋葬されています。須恵器床の人骨は身長166~170cmの壮年の男性骨と推定されます。

第2号人骨の頭蓋骨は厚さ10cm、長さ40cm、幅30cm程度の台形状の石に嵌入と嵌合を伏せた状態で置き、さらに木質の製品で覆ってその上に乗せてあったようである（木質の製品は不明）。歯牙の一部には赤い顔料が塗布されています。おそらく水銀朱と思われますがそれは丹念に塗ったという状況ではなく、口の部分に流したといった方がよい状況でした。

第3号人骨は、2号人骨と4号人骨のあいだに、50cm×30cmの範囲で左上腕骨や右脛骨、骨盤などの骨がまとめて置いてあったものです。追葬の際に元の人骨を集骨したのではないかと考えています。

(注1) 石棺の材質については、島根大学理学部地質学教室助教授沢田順弘先生にX線照射によって、その組成を分析していただきました。それによると重量比でSiO₂が74%、Al₂O₃が16%あったそうです。この組成は松江市の近郊では荒島石に近い組成ですが、ただ荒島石に比べてマトリックス（岩片）が少ないという特徴があるそうです。

(注2) C-5号穴とC-4号穴、及びC-1号穴で出土した人骨については、現地での取り上げから、鳥取大学助教授井上見孝先生に指導していただきました。人骨については、先生の現地でのコメントを参考にしていますが、詳細は本書の附録で掲載させていただきました。

遺物 玄室内には最初に玄門入口付近中央に大型の提瓶があります。これはC-1号横穴墓のもとの同様です。第2号人骨にともなう供献品と思われますが、この人骨には、そのほかに、頭部附近に鍍銀環1セット（2個）、埴1、蓋坏3セット（6個体=うち1セットは枕に使用している）、刀子2本、足元にはガラス小玉1個、水晶玉1個、小型埴1、蓋坏1セット（2個体）、台付翫がありました。須恵器床の2号人骨の頭部付近には、埴1、翫1、三方二段透の高坏、枕に使用したと思われる蓋坏2セット（4個）がありました。さらに遺骸に沿ったように蓋坏2セットと高坏2個（脚部欠損）がいずれも伏せた状態で並べてあります。

石棺内には玄門側の頭部付近の左右に耳環と思われる金属製の遺物があり、寛骨付近に刀子が1本ありました。他には供献遺物はない。石棺の外側の左側壁には蓋坏1、小型の高台付長類壺1、高坏1がありました。蓋坏はC-1号横穴墓と同様の特徴をもとと思われます。C群の横穴墓から出土している土器も全体的に同様の特徴を持っていますので山本編年Ⅲ期後半頃と思われますので6世紀後半ごろの構築と推定されます。

4. 出土遺物の検討

各横穴墓から出土した遺物はそれぞれの項目で概要を説明していますので、ここでは全体の総論的な流れを把握してみたいと思います。

(1) A支群の遺物の概要

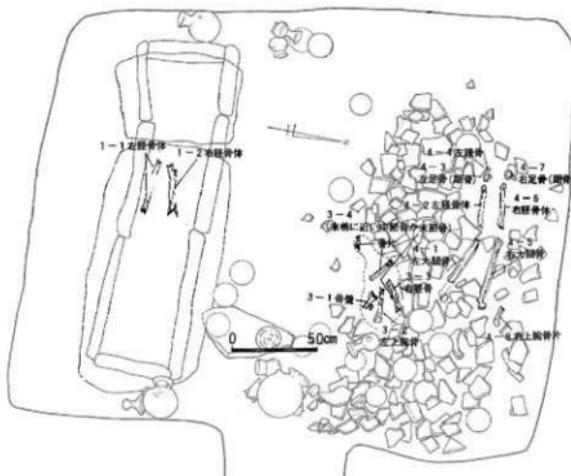
A-1号穴で出土している壺蓋、壺身は口径10cm前後で、削りはなく、山本編年Ⅳ期に入るものです。6世紀末頃のものではないでしょうか。A-3号穴で出土した丹塗りの高环と脚付短頸壺は、島根県では極めて珍しいものと思われますが、技法は簡便化されていますので、この横穴に供獻するためになにか作製されたものであろうと推定しています。

(2) B支群の遺物の概要

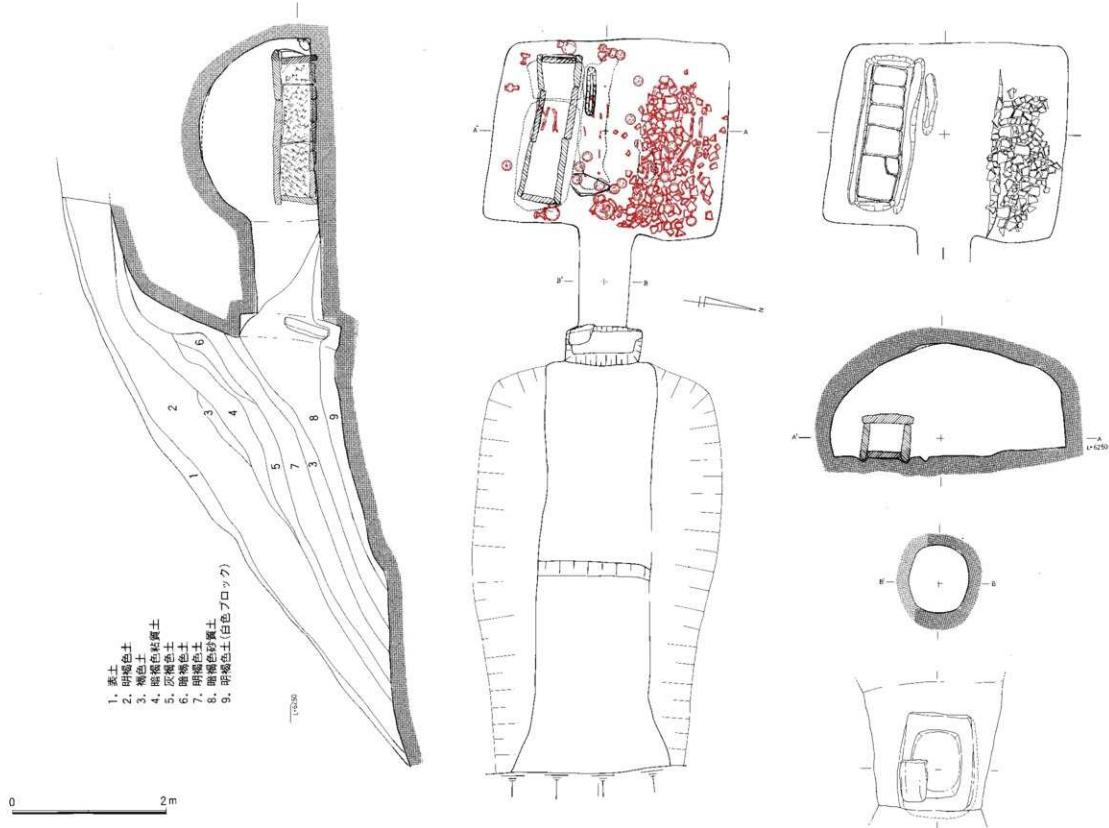
B-4号穴、B-5号穴で出土した壺蓋、壺身を見ると、口径8cm以下のものがあり、A群の遺物と比べても小型のものが多いようです。B-5号穴の玄室右側にあった遺物には、高台付碗に輪状つまみの蓋がセットで出ています。こうしたことから、B群の横穴は概して7世紀前半頃と考えられます。

(3) C支群の遺物の概要

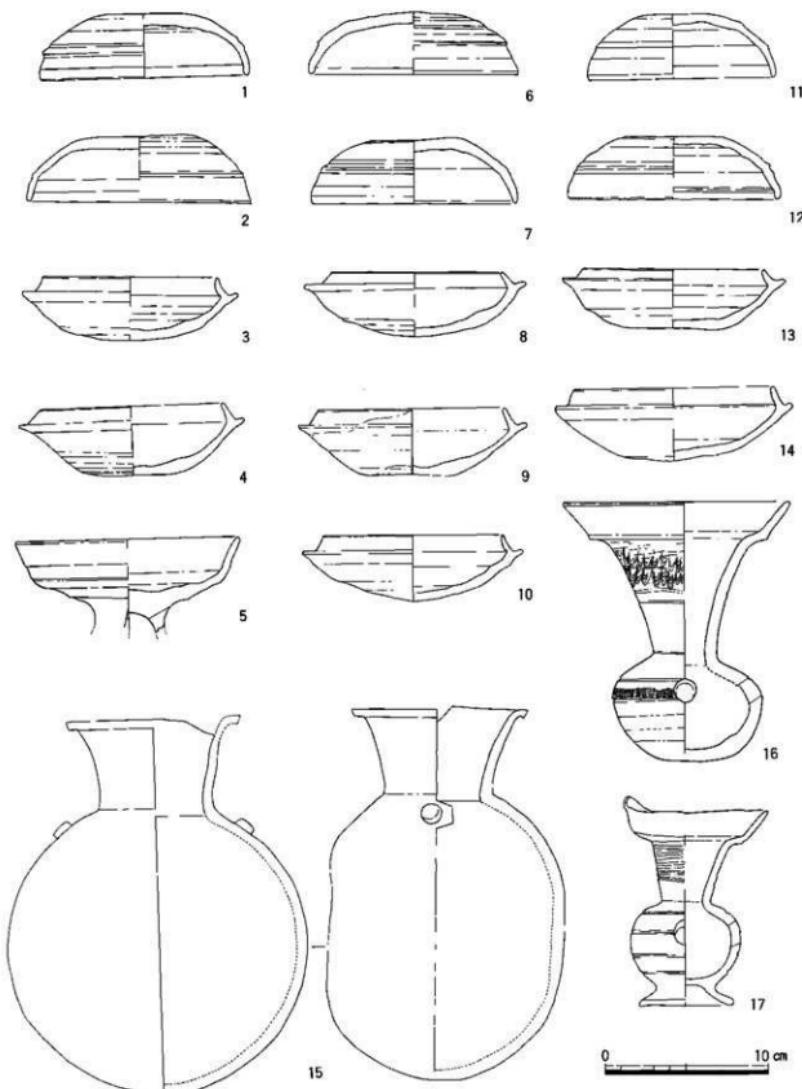
C-1号穴及びC-5号穴の壺蓋、壺身は平均して口径12cm前後で、削りのあるしっかりとした遺物が大部分を占めています。C群の中でもC-2号穴とC-3号穴はB群に近い特徴をもつものです。



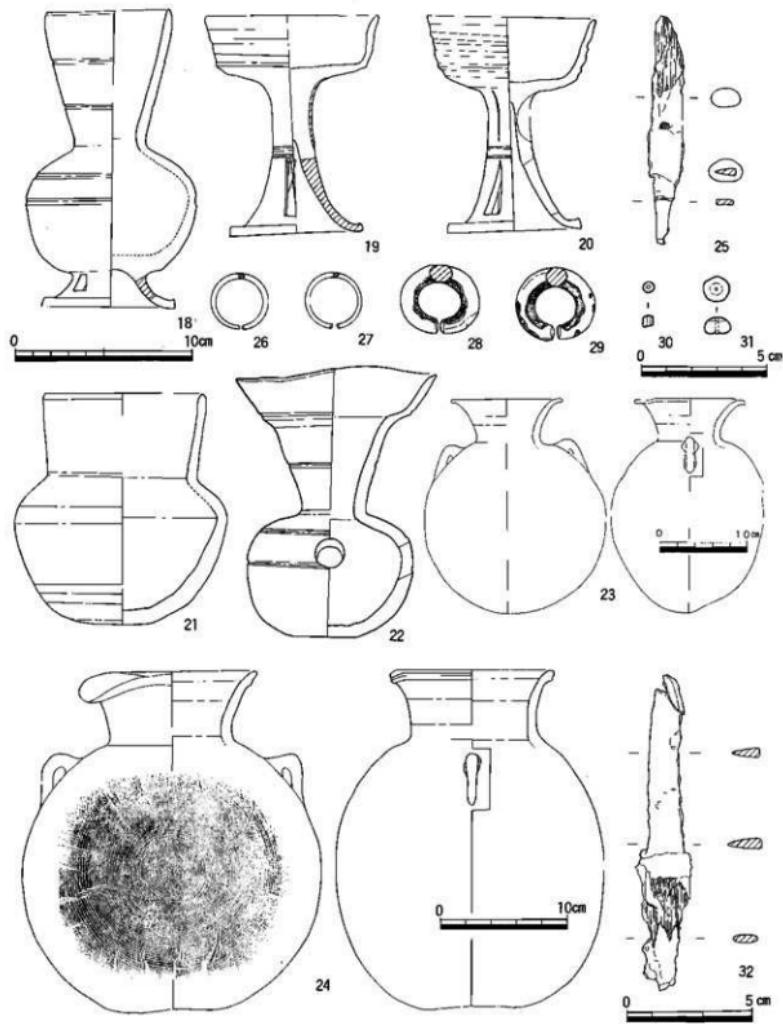
第25図 C-5号横穴墓出土人骨実測図



第26図 C-5号横穴墓実測図



第27図 C-5号横穴墓出土遺物実測図(1)



第28図 C-5号横穴墓出土遺物実測図(2)

横穴の掘られた位置にも無理があるようですので、この2穴はC群の中でも新しく構築されたのかもしれません。また田和山1号墳の石室の中で出土した大型の提瓶と同じものが、C-1号穴とC-5号穴に見られるので、この古墳群との密接な関係が伺われます。のことから6世紀後半にC-1号穴とC-5号穴から構築されはじめたのではないでしょうか。

5. 小 結

菅沢谷横穴群では合計12穴の横穴が発見されました。この横穴群はかなり高い標高に作られています。供獻されている遺物の中には、隣の田和山古墳群^(注3)と関係の深いものが見られます。また、石棺に使用した石材は、遠く安来市から運ばれてきた可能性もあります。荒島石は、同じ乃木地区の向荒神古墳の墓壙の底でも発見されていますが、こうした石材の関係も注目されます。

さて、この横穴群の各横穴から出土した蓋坏の形状から判断しますと、最初に構築されたのはC-1号穴とC-5号穴のようです。その時期は、田和山1号墳が造られた同じ時期か、その後、時を経ず造られたものと思われます。

閉塞の状況を見ると、C群は板で簡単に閉塞したもののようにですが、A群とB群の中には石によって閉塞されたものが多いことも分かりました。

また、B-4号穴とB-5号穴は前底部の切り合いからB-4号穴が後に造られたものと判断されるものもあります。

こうしたことから推定しますと、6世紀後半からこの地に横穴墓が造られはじめ、7世紀前半頃に収束する横穴群であると思われるのです。

(注3) 「田和山古墳群発掘調査概報」松江市教育委員会(91.3)

(注4) 「向荒神古墳発掘調査発掘調査報告書」松江市教育委員会(92.3)

菅沼谷横穴群出土遺物一覧表

A - 1

No.	出土地点	種 別	法 量(cm)	形 種 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
1	奥門部	長頭柶	口径 7.2 鋸高 20.2	やや彎り気味の鋒部に直ぐハサウエー字の洗鉢を施す 頭部外面に1条の洗鉢を施す	堅削或は刃に刃部へカズミを施す、その他の刃部ナダ	須恵器
2	玄室	平頭	口径 7.1 鋸高 16.1	底面は丸く、口端部に内方弧文を2個付ける	堅削下半約1/3に刃削ヘラケスリ、その後回転ナダ	須恵器 二重耳にかけたヘラ記号あり
3	玄室	坪頭	口径 11.2 鋸高 4.3	堅削した天井部から内方弧文に伸びて口縁部に至る	天井部外側ヘラ切り後ナダ 天井部内側ヘラ削止ナダ	須恵器 天井部外側にヘラ記号あり
4	玄室部	坪頭	口径 12.1 鋸高 4.4	堅削した天井部から内方弧文に伸びて口縁部に至る	天井部外側ヘラ切り後ナダ 天井部外側ヘラ削止ナダ	須恵器
5	玄室	坪身	口径 16.1 器高 4.8	底面は斜め上方に伸び、口縫部は斜め下方に伸びる	堅削外側ヘラ切り後ナダ その他の刃部ナダ	須恵器
6	奥門部	平底柶	口径 17.6 鋸高 5.5	平坦な底面から斜め下方に伸びる	天井部内側ヘラ削止ナダ 天井部外側ヘラ削止ナダ	土師器 底部外面にすす付書
7	玄室	小型坪	口径 5.5 鋸高 7.3	底面はやや彎り、口縫部は直立氣味に伸びる	堅削下半約1/3に刃削ヘラケスリ、その後回転ナダ	須恵器 二重耳にヘラ記号あり
8	玄室	小型坪	口径 7.7 器高 4.6	底面は斜め下方に伸びる	堅削外側ヘラ切り後ナダ	須恵器
9	前壁部	両台付柶	口径 14.8 器高 4.8	口縫部はやや内方弧文を施すに直る、底面は内方弧文を施す	天井部内側堅削ナダ 天井部外側ヘラ削止ナダ	須恵器
10	前壁部	大型平頭	口径 1.3 器高 17.8	彎り気味の底面に刃部手を2箇所付ける	上半部はタクモ後削カキ目仕字ナダ	須恵器
11	奥門部	短刀	全長 19.7 刃幅 3.8	裏面底部を斜め削する	刃部外側に金網	
12	玄室	直刀	全長 51.5 刃幅 8.0	各刃部を欠損、刃が1/2残		
13	玄室	刀子	全长 11.5 刃幅 1.3	刃先部及び両端以下欠損する		

A - 2

No.	出土地点	種 別	法 量(cm)	形 種 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
出上遺物なし(横穴墓とは思ひ難い)						

A - 3

No.	出土地点	種 別	法 量(cm)	形 種 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
1	玄室	高坪	底径 12.1 器高 13.7	天井部外側に上部の底面に直ぐハサウエー字の洗鉢を施す 底面は内方弧文で2段に分す	天井部外側堅削止ナダ、その他の刃部ナダ	須恵器
2	玄室	坪頭	口径 12.6 器高 4.5	堅削する天井部から斜め下方に伸びる 底面は内方弧文で2段に分す	天井部外側堅削止ナダ、その後回転ナダ	須恵器
3	玄室	坪頭	口径 13.0 器高 4.9	やや斜面気味の天井部から斜め下方に伸びる、穂は無い	天井部外側堅削ヘラケズリ 天井部内側ナダ	須恵器
4	玄室	坪身	口径 11.8 锯高 4.6	底面は斜め上方に伸びる、刃部手を2箇所付ける	天井部外側堅削ヘラケズリ その他の刃部ナダ	須恵器
5	玄室	高坪	口径 14.3 锯高 12.7	浅い井筒形の口縫部は斜め下方に伸びて直ぐハサウエー字の洗鉢を施す	天井部外側一部にハケコガ様なる	土師器 坪頭外側、坪頭内側に赤色渲染
6	玄室	脚付短頭柶	口径 8.6 器高 13.0	底面は斜め下方に直ぐハサウエー字の洗鉢を施す	口縫部及び脚部外側に洗鉢手を施す	須恵器 脚部外側に赤色渲染

B - 2

No.	出土地点	種 別	法 量(cm)	形 種 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
1	玄室	坪身	口径 16.9 器高 4.5	底面は斜め上方に伸びる、刃部手を2箇所付ける	天井部外側堅削ヘラケズリ 天井部内側ナダ	須恵器
2	玄室	刀子	埋在長 19.8 刃幅 1.3 実長 5.7	底面は木質が残る		切先部欠損
3	玄室	帆船	帆舟長 4.0 帆舟幅 2.5	帆舟部は二角形状を呈する		帆舟以下欠損
4	玄室	帆船	帆舟長 4.5 帆舟幅 2.5	帆舟部は三角形状を呈する		帆舟以下欠損

B - 3

No.	出土地点	種 別	法 量(cm)	形 種 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
1	玄室	坪頭	口径 12.8 锯高 —	底面はやや斜め上方に洗鉢を施す	天井部内側ナダ	須恵器
2	玄室	坪頭	口径 12.4 器高 —	口縫部外側に2条の洗鉢を施す	内外面回転ナダ	須恵器
3	玄室	坪頭	口径 12.0 锯高 —	口縫部外側に2条の洗鉢を施す	内外面回転ナダ	須恵器

No	出土地点	種別	法 番(㎝)	形 種 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
4	前庭	环茎	口径 1.6 器高 1.6	天井部は肥厚し、後はやや純い	天井部外周部へラクゼリ 部へラクゼリ部止ナシ、その他の内側部止ナシ	原忠器
5	前庭	环身	口径 1.5 器高 1.5	受部は前の上方に伸びる	内外面削軸ナシ	原忠器
6	前庭	环身	口径 1.2 器高 1.5	口縁部は内傾して伸びる	内外面削軸ナシ	原忠器

II - 4

No	出土地点	種 別	法 番(㎝)	形 種 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
1	前庭部	环茎	口径 11.3 器高 4.3	断面そろそろ直角形に近じ て伸びる	天井部外周部へラクゼリ 部止ナシ、その他の内側部止ナシ	原忠器
2	前庭部	环茎	口径 11.0 器高 4.3	やや肥厚した天井部から 内側部へ伸びる	天井部外周部へラクゼリ 部止ナシ	原忠器
3	玄室	环茎	口径 11.0 器高 4.6	全体に肥厚軸で天井部 をかにつけたもの	天井部外周部へラクゼリ 部止ナシ、その他の内側部止ナシ	原忠器
4	前庭部	环身	口径 8.8 器高 3.7	天井部は斜め上方に伸び る	天井部外周部へラクゼリ 部止ナシ、その他の内側部止ナシ	原忠器
5	前庭部	高环	口径 11.6 器高 9.3	天井部は斜め上方に伸び る。内側部は直角形に 伸びる	天井部外周部へラクゼリ 部止ナシ、その他の内側部止ナシ	原忠器
6	玄室	高台付环	口径 17.6 器高 6.3	U字形基部はやや内寄り形 に傾く	天井部外周部は内側部 へラクゼリ、その他の内側部止ナシ	原忠器
7	前庭部	环身	口径 9.2 器高 3.0	天井部は斜め上方に伸び、 U字形基部は内側部する	天井部外周部へラクゼリ 部止ナシ	原忠器
8	前庭部	环身	口径 10.2 器高 3.5	天井部は斜め上方に伸び、 U字形基部は全体的に肥厚する	天井部外周部へラクゼリ 部止ナシ	原忠器
9	前庭部	环身	口径 11.9 器高 3.6	天井部は斜め上方に伸び、 U字形基部は全体的に肥厚する	天井部外周部へラクゼリ 部止ナシ	原忠器
10	玄室	环身	口径 9.8 器高 3.8	天井部は斜め上方に伸び、 U字形基部は全体的に肥厚する	天井部外周部へラクゼリ 部止ナシ	原忠器
11	玄室	环身	口径 9.9 器高 4.0	天井部は斜め上方に伸び、 U字形基部は全体的に肥厚する	天井部外周部へラクゼリ 部止ナシ	原忠器
12	玄室	残先盒	全長 29.4 幅厚 20.8	U字形基部		

II - 5

No	出土地点	種 別	法 番(㎝)	形 種 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
1	玄室	盘(輪状)	口径 16.2 器高 3.5	肥厚する天井部外周に沿 て伸びる	天井部外周部へラクゼリ 部止ナシ、その他の内側部止ナシ	原忠器 輪 13 号身とセット
2	玄室	高台付环	口径 17.9 器高 5.5	天井部は斜め上方に伸び、 U字形基部は直角形で、字状に 伸びる	天井部外周部へラクゼリ 部止ナシ	原忠器 輪 14 号身とセット
3	玄室	盘	口径 15.4 器高 24.7	天井部は偏らぬ、丸い頂部を もち、U字形基部は直角外反す るもの	天井部外周部へラクゼリ 部止ナシ	原忠器
4	玄室	环茎	口径 11.2 器高 4.4	丸い頂部を伸びて天井部へ なだらかに伸びる	天井部外周部へラクゼリ 部止ナシ	原忠器
5	玄室	环身	口径 9.6 器高 3.5	天井部は斜め上方に伸び、 U字形基部は内側部する	天井部外周部へラクゼリ 部止ナシ	原忠器
6	玄室	环身	口径 8.4 器高 3.0	天井部は斜め上方に伸び、 U字形基部は内側部する	天井部外周部へラクゼリ 部止ナシ	原忠器
7	玄室	环身	口径 9.6 器高 3.9	天井部は斜め上方に伸び、 U字形基部は内側部する	天井部外周部へラクゼリ 部止ナシ	原忠器
8	玄室	环身	口径 10.1 器高 4.2	天井部は斜め上方に伸び、 U字形基部は内側部する	天井部外周部へラクゼリ 部止ナシ	原忠器
9	玄室	环身	口径 10.0 器高 4.6	天井部は斜め上方に伸び、 U字形基部は内側部する	天井部外周部へラクゼリ 部止ナシ	原忠器
10	玄室	直刀	全长 19.5 宽厚 2.4 刃長 3.4 刃厚 0.9	直刀の柄を持つが、直か は見られない		刀身部には木質が残 り、直刀は木質とする
11	玄室	嵌曲刀	全长 7.6	直刀形で頭部を折り曲げ る		
12	玄室	嵌曲刀	全长 5.5	直刀形で頭部を折り曲げ る		頭部の一部を打先を 大損する
13	玄室	嵌曲刀	全长 4.8	頭部を折り曲げる直刀 は木質が残る		

No	出土地点	種別	法 畳 (m)	形 勢 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
14	支那	嵌角釘	既存高 3.3	釘先は不規則な鋸歯状で、落木付近に木片が飛んでる。		釘先部は欠損する
15	支那	金鍔環	環径 2.5 副環径 0.8~0.55	全面鍔合する		
16	支那	金鍔環	環径 2.4 副環径 0.8~0.55	全面鍔合する		

c = 1

No	出土地点	性 別	法 量(m)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
1	玄室	外縁	口径19.0 高さ 3.5	天井部は斜めで、口縁部外面に白井漆からなる2条の沈線を残す	天井部外面斜面へラケズリ、天井部外面斜面止ナダ、その他の施設ナダ	原忠器
2	玄室(?)	外縁	口径12.6 高さ 4.5	かや板部は斜めで、口縁部から内側に2条の沈線を残す。天井部外面には無い	天井部外面斜面止ナダ、その他の施設ナダ	原忠器
3	玄室(L)	外縁	口径10.6 高さ 3.8	天井部は斜め上方に伸びる。口縁部は内側して伸びる	天井部外面斜面へラケズリ、その他の施設ナダ	原忠器
4	玄室(L)	外縁	口径10.7 高さ 3.0	天井部は斜め上方に伸びる。口縁部は内側して伸びる	天井部外面斜面へラケズリ、その他の施設ナダ	原忠器
5	玄室(L)	外縁	口径11.8 高さ 4.5	天井部は斜め上方に伸びる。口縁部は内側して伸びる	天井部外面斜面へラケズリ、その他の施設ナダ	原忠器
6	玄室(L)	外縁	口径12.7 高さ 3.8	天井部はやや低く、口縁部は内側して下落する	天井部外面斜面止ナダ、その他の施設ナダ	原忠器
7	玄室(L)	外縁	口径11.0 高さ 3.7	天井部はやや上方に伸びる	天井部外面斜面止ナダ、その他の施設ナダ	原忠器
8	玄室(L)	外縁	口径11.4 高さ 4.1	天井部は斜め上方に伸びる。口縁部は内側して伸びる	天井部外面斜面止ナダ、その他の施設ナダ	原忠器
9	玄室(L)	外縁	口径12.9 高さ 4.5	天井部はやや低く、口縁部は内側して下落する	天井部外面斜面止ナダ、その他の施設ナダ	原忠器
10	玄室(?)	外縁	口径13.1 高さ 4.7	天井部は斜め上方に伸びる。口縁部は内側して伸びる	天井部外面斜面止ナダ、その他の施設ナダ	原忠器
11	玄室(?)	外縁	口径11.0 高さ 4.8	天井部は斜め上方に伸びる。口縁部は内側して伸びる	天井部外面斜面止ナダ、その他の施設ナダ	原忠器
12	玄室(?)	外縁	口径11.4 高さ 4.4	天井部は斜め上方に伸びる。口縁部は内側して伸びる	天井部外面斜面止ナダ、その他の施設ナダ	原忠器
13	玄室(L)	増	口径18.1 高さ15.2	天井部は斜め上方に伸びる。口縁部はやや下方に立派な氣泡に伸びる	天井部下面斜面止ナダ、その他の施設ナダ	原忠器
14	玄室	横縁	口径 — 高さ19.2	円柱で厚みのある鋸葉部に直進化した把手を2個付けける	把手部は斜めへラケズリ及び天井部内外側は凹状ナダ	原忠器
15	玄室(?)	横縁	口径10.1 高さ20.6	円柱で厚みのある鋸葉部に直進化した把手を2個付けける	把手部は斜めへラケズリ及び天井部内外側は凹状ナダ	原忠器
16	玄室(L)	横縁	口径 7.7 高さ14.7	把手部は斜めで、把手部に把手を2個付けける。把手部に把手を2個付けける	把手部内外側は凹状ナダ、把手部の4/4を同軸へラケズリ、その他の施設ナダで止める	原忠器
17	虎門	外縁	口径10.8 高さ 3.9	天井部は斜め上方に伸びる。口縁部は内側して伸びる	天井部外面へラケズリ後ナダ、その他の施設ナダ	原忠器
18	虎門	外縁	口径11.3 高さ 3.95	天井部は斜め上方に伸びる。口縫部は内側して伸びる	天井部外面は内軸へラケズリ	原忠器
19	虎門	有蓋外縁	口径11.4 高さ 5.9	把手部はやや低く、口縫部は内側して把手を2箇所に分離する	把手部内外側は凹状ナダ、その他の施設ナダ	原忠器
20	玄室(?)	横縁	口径 — 高さ —	把手部に把手を2箇所付ける	把手部は手引き把手孔付天井部内外側は凹状ナダ	複数回の変形が著しい
21	前庭部	高坪	口径15.2 高さ11.0	把手部外面に1箇所の長い筋を残す。把手を2箇所に分離する	把手部外面はナダ、把手部内外側は凹状ナダ	原忠器
22	前庭部	高坪	口径13.1 高さ11.6	把手部外面に2箇所の長い筋を残す。把手を2箇所に分離する	把手部内外側は凹状ナダ、その他の施設ナダ	原忠器
23	前庭部	高坪	口径14.0 高さ —	把手部外面に残る2箇所の長い筋を残す。把手を2箇所に分離する	把手部内外側は凹状ナダ、その他の施設ナダ	原忠器
24	前庭部	高坪	口径14.3 高さ11.0	把手部外面に長い筋を残す。把手を2箇所に分離する	把手部内外側は凹状ナダ、その他の施設ナダ	原忠器
25	前庭部	増	口径 9.9 高さ12.8	把手部は複数回D字形に開く。把手部はやや下方に傾く	把手部はD字形に開く把手部へラケズリ、その他の施設ナダ	原忠器

No	出土地点	種 別	法 量(cm)	形 塗 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
24	前庭部	高杯	口径14.0 高さ11.5	杯部外側に1.5cmの浅い横を有する。内側に1.5cmの浅い溝を有す。	杯部外側に1.5cmの浅い横を有する。内側に1.5cmの浅い溝を有す。	前庭器
25	玄室	直刀	全長17.8 口幅44.0 刃幅13.2 刃厚0.7	先端の斜めには本筋は通かず、その先端は斜めには本筋は通す。	先端の斜めには本筋は通かず、その先端は斜めには本筋は通す。	刀身部に木質が残る。
26	玄室(L)	鉄鎌	全长16.6 機身長2.4 機身幅1.0	頭部は長く、頭部は無闇で握持は行かない。	頭部は長く、頭部は無闇で握持は行かない。	
27	玄室(L)	鉄鎌	全长15.7 機身長3.8 機身幅0.9	頭部は長くない、頭部は無闇で握持は行かない。	頭部は長くない、頭部は無闇で握持は行かない。	
28	玄室(L)	鉄鎌	全长15.9 機身長1.9 機身幅0.9	頭部は長く、機身は無闇で握持は行かない。	頭部は長く、機身は無闇で握持は行かない。	
29	玄室(L)	鉄鎌	全长15.7 機身長3.8 機身幅0.9	頭部は長くない、頭部は無闇で握持は行かない。	頭部は長くない、頭部は無闇で握持は行かない。	
30	玄室(L)	鉄鎌	全长15.9 機身長1.9 機身幅0.9	頭部は長く、機身は無闇で握持は行かない。	頭部は長く、機身は無闇で握持は行かない。	
31	玄室(L)	鉄鎌	全长15.9 機身長1.9 機身幅0.9	頭部は長くない、頭部は無闇で握持は行かない。	頭部は長くない、頭部は無闇で握持は行かない。	
32	玄室(L)	鉄鎌	全长15.7 機身長1.3 機身幅1.0	頭部は長く、機身は無闇で握持は行かない。	頭部は長く、機身は無闇で握持は行かない。	
33	玄室(L)	鉄鎌	全长15.9 機身長1.7 機身幅0.8	頭部は長く、頭部は無闇で握持は行かない。	頭部は長く、頭部は無闇で握持は行かない。	
34	玄室(R)	鉄鎌	全长15.3 機身長2.9 機身幅1.4	頭部は長く、頭部は三角形を呈す。頭部には木質が残り、頭部を握る。	頭部は長く、頭部は三角形を呈す。頭部には木質が残り、頭部を握る。	
35	玄室(R)	鉄鎌	全长15.1 機身長2.0 機身幅1.5	頭部は長く、頭部は三角形を呈す。頭部は握持用。	頭部は長く、頭部は三角形を呈す。頭部は握持用。	
36	玄室(L)	鉄鎌	全长12.4 機身長4.5 機身幅2.2	頭部は短く、頭部は無闇で握持は行かない。	頭部は短く、頭部は無闇で握持は行かない。	
37	玄室(R)	鉄鎌	全长15.5 機身長4.1 機身幅2.2	頭部は短く、頭部は無闇で握持は行かない。	頭部は短く、頭部は無闇で握持は行かない。	
38	玄室	鉄鎌	全长15.7 機身長1.7 機身幅1.0	頭部は長く、頭部は無闇で握持は行かない。	頭部は長く、頭部は無闇で握持は行かない。	
39	玄室(L)	鉄鎌	全长11.6 機身長3.1 機身幅1.5	頭部は長く、頭部は無闇で握持は行かない。	頭部は長く、頭部は無闇で握持は行かない。	頭部を欠損する。
40	玄室(R)	鉄鎌	全长15.6 機身長5.8 機身幅3.0	機身部は丸く、頭部を握る。頭部には木質が残り、頭部を握る。	機身部は丸く、頭部を握る。頭部には木質が残り、頭部を握る。	
41	玄室(L)	刀子	全长16.9 口幅5.6 刃幅0.9 刃厚0.3	刃先部は尖鋒し、玉頭を有する。	刃先部は尖鋒し、玉頭を有する。	
42	玄室(L)	円金具	全長3.9	頭部は丸く、頭面方形、木質が残る。	頭部は丸く、頭面方形、木質が残る。	
43	玄室	円金具	全長3.9	頭部は丸く、頭面方形、木質が残る。	頭部は丸く、頭面方形、木質が残る。	
44	玄室(L)	円金具	全長3.5	頭部は丸く、頭面方形、木質が残る。	頭部は丸く、頭面方形、木質が残る。	

C - 2

No	出土地点	種 別	法 量(cm)	形 塗 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
1	玄室	杯	口径 9.9 高さ13.4	頭部外側にやや内凹する。頭部に口縁部を持つ。	底部付近外側に頭部をヘラケズリ。その他の頭部ナメ。	前庭器
2	玄室	杯蓋	口径12.8 高さ 4.2	やや平滑な火口部から縁部まで長い、複数の突起がある。	大井部外側に頭部をヘラケズリ。その他の頭部ナメ。	前庭器
3	玄室	杯身	口径13.8 高さ 4.2	頭部はやや傾め上方に伸びる。口縁部は内側して伸びる。	大井部外側に頭部をヘラケズリ。その他の頭部ナメ。	前庭器
4	前庭部?	杯身	口径 9.9 高さ 4.1	頭部はやや傾め、口縁部は内側して伸びる。	大井部外側に頭部をヘラケズリ。その他の頭部ナメ。	前庭器
5		鉄鎌	全长9.7 機身長6.3 機身幅4.5	頭部は短く、頭部は三角形を呈す。頭部は丸く、頭部は先端は丸く先端は尖鋒。	頭部外側に頭部をヘラケズリ。その他の頭部ナメ。	前庭部は欠損する。
6	玄室	耳傾	頭幅 3.3 脊部径 0.7	頭部に脊骨で埋められている。頭部の有無は不明。	頭部外側に頭部をヘラケズリ。その他の頭部ナメ。	

C - 3

No	出土地点	種 別	法 量(cm)	形 塗 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
1	玄室	杯蓋	口径15.0 高さ 4.2	口縁外側に1.5cmの浅い溝、内側に1.5cmの浅い溝を有す。	大井部外側に頭部をヘラケズリ。その他の頭部ナメ。	前庭器
2	玄室	杯蓋	口径12.6 高さ 4.0	頭部と把頭部の間隔の大きさが大きい。頭部から縁部に至る、複数の突起がある。	大井部外側に頭部をヘラケズリ。その他の頭部ナメ。	前庭器
3	玄室	杯蓋	口径13.2 高さ 4.9	頭部外側の大きさが頭部から縁部に至る、複数の突起がある。	大井部外側に頭部をヘラケズリ。その他の頭部ナメ。	前庭器
4	玄室	杯身	口径11.0 高さ 4.9	頭部はやや傾め上方に伸びる。頭部は内側して伸びる。	大井部外側に頭部をヘラケズリ。その他の頭部ナメ。	前庭器
5	玄室	杯身	口径10.5 高さ 4.1	頭部はやや傾め上方に伸びる。頭部は内側して伸びる。	大井部外側に頭部をヘラケズリ。その他の頭部ナメ。	前庭器
6	玄室	杯身	口径10.5 高さ 3.9	頭部はやや傾め上方に伸びる。頭部は内側して伸びる。	大井部外側に頭部をヘラケズリ。その他の頭部ナメ。	前庭器

No	出土地点	種 別	法 量(m)	形 異 の 特 徴	手 法 の 特 徴	傳 考
7	玄室	坪身	口径10.2 高さ5.9	舌状部は内側め上方に伸びて伸びる 舌状部は内側めで伸びる	底部外周回転ヘラケズリナダ、その他の 回転ナダ	痕跡器
8	玄室	坪身	口径10.0 高さ4.1	舌状部は内側めで伸びる 舌状部は内側めで伸びる	底部外周回転ヘラケズリナダ、その他の 回転ナダ	痕跡器
9	玄室	刀子(?)	残存長5.8 刃幅1.1 刃厚0.4	舌状部を内側めで伸びる 舌状部を内側めで伸びる	底部外周回転ヘラケズリナダ、その他の 回転ナダ	

C - 4

No	出土地点	種 別	法 量(m)	形 異 の 特 徴	手 法 の 特 徴	傳 考
1	玄室	平頭	口径 —— 高さ15.2	なじらかで内側めで伸びる 底部外周回転ヘラケズリナダ、その他の 回転ナダ	底部外周回転ヘラケズリナダ、その他の 回転ナダ	痕跡器

C - 5

No	出土地点	種 別	法 量(m)	形 異 の 特 徴	手 法 の 特 徴	傳 考
1	玄室	坪身	口径12.5 高さ4.0	舌状部は内側めで伸びる 舌状部から後端部にかけて横筋を有す	大井部外周回転ヘラケズリナダ、その 他の回転ナダ	痕跡器
2	玄室	坪身	口径13.6 高さ4.0	舌状部から後端部にかけて横筋を有す	大井部外周回転ヘラケズリナダ、その 他の回転ナダ	痕跡器
3	玄室	坪身	口径18.4 高さ3.8	舌状部は内側めで伸びる 舌状部は内側めで伸びる	底部外周回転ヘラケズリナダ、その他の 回転ナダ	痕跡器
4	玄室	坪身	口径13.8 高さ4.3	舌状部は内側めで伸びる 舌状部は内側めで伸びる	底部外周回転ヘラケズリナダ、その他の 回転ナダ	痕跡器
5	玄室	無蓋高坪	口径13.4 高さ ——	舌状部は内側めで伸びる 舌状部は内側めで伸びる	底部外周回転ヘラケズリナダ、その他の 回転ナダ	痕跡器
6	玄室	坪身	口径12.8 高さ3.8	舌状部は内側めで伸びる 舌状部は内側めで伸びる	大井部外周回転ヘラケズリナダ、その 他の回転ナダ	痕跡器
7	玄室	坪身	口径12.2 高さ4.0	舌状部は内側めで伸びる 舌状部は内側めで伸びる	大井部外周回転ヘラケズリナダ、その 他の回転ナダ	痕跡器
8	玄室	坪身	口径11.6 高さ4.0	舌状部は内側めで伸びる 舌状部は内側めで伸びる	底部外周回転ヘラケズリナダ、その他の 回転ナダ	痕跡器
9	玄室	坪身	口径11.2 高さ4.2	舌状部は内側めで伸びる 舌状部は内側めで伸びる	底部外周回転ヘラケズリナダ、その他 の回転ナダ	痕跡器
10	玄室	坪身	口径10.8 高さ4.0	舌状部は内側めで伸びる 舌状部は内側めで伸びる	底部外周回転ヘラケズリナダ、その他 の回転ナダ	痕跡器
11	玄室(C)	坪身	口径12.2 高さ4.0	大井部から内側めで伸びる 底部外周回転ヘラケズリナダ、その他 の回転ナダ	大井部外周回転ヘラケズリナダ、その他 の回転ナダ	痕跡器
12	玄室	坪身	口径12.1 高さ3.9	舌状部から内側めで伸びる 底部外周回転ヘラケズリナダ、その他 の回転ナダ	大井部外周回転ヘラケズリナダ、その他 の回転ナダ	痕跡器
13	玄室(C)	坪身	口径11.0 高さ3.7	舌状部は内側めで伸びる 底部外周回転ヘラケズリナダ、その他 の回転ナダ	底部外周回転ヘラケズリナダ、その他 の回転ナダ	痕跡器
14	玄室	坪身	口径11.8 高さ4.5	舌状部は内側めで伸びる 底部外周回転ヘラケズリナダ、その他 の回転ナダ	底部外周回転ヘラケズリナダ、その他 の回転ナダ	痕跡器
15	玄室	坪頭	口径10.0 高さ25.0	横幅で厚みのある鋸歯部を持 つ舌状部	底部は内側めで伸びる 底部外周回転ヘラケズリナダ、その他 の回転ナダ	痕跡器
16	玄室	縫	口径11.3 高さ15.2	やや小形で横幅で厚みのある鋸歯部を持 つ舌状部	底部外周回転ヘラケズリナダ、その他 の回転ナダ	痕跡器
17	玄室	白坪頭	口径12.9 高さ3.8	舌状部の内側めで伸びる 底部外周回転ヘラケズリナダ、その他 の回転ナダ	底部外周回転ヘラケズリナダ、その他 の回転ナダ	痕跡器
18	玄室	台付長頭柵	口径 6.8 高さ17.1	舌状部の内側めで伸びる 底部外周回転ヘラケズリナダ、その他 の回転ナダ	底部外周回転ヘラケズリナダ、その他 の回転ナダ	痕跡器
19	玄室	高坪	口径 9.6 高さ12.1	舌状部の内側めで伸びる 底部外周回転ヘラケズリナダ、その他 の回転ナダ	底部外周回転ヘラケズリナダ、その他 の回転ナダ	痕跡器
20	玄室	高坪	口径 9.5 高さ12.6	舌状部の内側めで伸びる 底部外周回転ヘラケズリナダ、その他 の回転ナダ	底部外周回転ヘラケズリナダ、その他 の回転ナダ	痕跡器
21	玄室	縫	口径 9.3 高さ15.25	舌状部を内側めで伸びる 底部外周回転ヘラケズリナダ、その他 の回転ナダ	底部外周回転ヘラケズリナダ、その他 の回転ナダ	痕跡器

地	出土地点	種別	法 異 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
22	玄室	鍬	口径13.9 厚さ16.0	下端は底部を持つ鋸部外側 に刃先を施す	握部下部は鋸部ヘラケズリ その他の部以外回転ナギ	頭蓋骨 外側にヘラ記号 あり
23	玄室	鍬頭	口径12.6 厚さ24.8	円形で底のみのある鋸部に把手を2箇付ける	握部はカク刃、口縁部内外 に凹凸がある	頭蓋骨
24	玄室	大型鍬頭	口径14.5 厚さ28.1	円形で底の厚い鋸部に外反して把手を2箇付ける	握部はカク刃、口縁部内外 に凹凸がある	頭蓋骨
25	玄室	刀子	全長 9.1	刀身に刃が残存する		
26	石棺内	鏡環	周径2.25 刃部径0.2	全面に銅錫されている		
27	石棺内	鏡環	周径 2.2 刃部径0.2	全面に銅錫されている		
28	玄室	金鏡環	周径 3.1 刃部径0.7±0.8	一部鏡金が剥離し、残者が付着する		
29	玄室	金鏡環	周径3.1 刃部径0.8	一部鏡金が剥離し、残者が付着する		
30	玄室	ガラス小玉	直径4.5 mm 厚さ1 mm 厚さ4.0 mm	青緑色を呈する		
31	玄室	水晶玉	周径10.65 mm 厚さ5.5 mm 孔径1.5 mm	無色透明		
32	石棺内	刀子	全長12.7 刀身 7.3 刃幅1.3 刀厚 0.4	刀身部は欠損するが、高身には木質部が残る		

菅沢谷横穴群一覧表

	玄室						奥道		奥門		主軸方向	天井構造	開口	奥壁標高	玄室遺物			奥門・前庭部遺物	備考
	奥行	幅	高さ	長さ	幅	高さ	幅	高さ	石	55.9m					小型鋤 2	直刀 1	刀子 1	平蓋 1	人骨 1
A-1	2.40	1.07	1.14	1.0	0.74	不明	1.10	不明	X132.00W	丸天井形	石	55.9m				大型平蓋 1	人骨 1		
A-2	—	—	—	—	—	—	—	—	(横穴とは誤わしい)										
A-3	2.60	2.35 2.60	不明	1.16	0.67 0.95	3.95	0.98	8.92	X 77.30W	丸天井形	石	57.2m	环蓋 2	高环 1	脚付環彌生				
B-1	2.32	2.52	1.32	不明	0.76	3.90 1.60	不明	不明	X129.30W	丸天井形	石	58.3m	环身 1			鉄鑿 2		人骨?	
B-2	2.12	1.50	1.24	0.80	0.70	不明	0.72	不明	X 97.70W	丸天井形	板	61.5m			平底环 2				
B-3	—	—	—	—	0.61	0.66	不明	不明				62.6m	鐵片					未完?	
B-4	1.92 2.15	1.92 2.15	1.30	1.20	0.64	0.89	1.15	1.00	X 23.80W	丸天井形	石	63.3m	环蓋 3	直刀 1	鉄鑿 1	环身 1	高环 1		
B-5	2.95 2.65	2.28 2.65	1.40	1.20	0.65	0.88	1.15	1.00	X 68.80W	丸天井形	石	63.9m	环蓋 4	直刀 1	鉄鑿 2	环身 4	台付鏡 1 (輪状) 亞 1		
C-1	2.55	2.35	1.37	0.98	0.93	0.91	0.90	1.35	X125.50W	丸天井形	板?	61.4m	横板 1	直刀 1	刀子 2	环身 2	环蓋 2	人骨2体	
C-2	2.35	2.08	不明	0.90	0.85 1.45	不明	1.50	不明	X143.70W	丸天井形	板?	63.3m	环身 2	耳環 1	耳環 1	环蓋 1	環 1		
C-3	2.45	2.70	不明	1.00	0.70	不明	1.00	0.80 0.90	X150.30W	丸天井形	板?	62.9m	环身 5	刀子 1				人骨	
C-4	1.90	2.10	1.12	1.55	1.10	0.75	1.11	1.16	X109.80W	丸天井形	板?	62.5m	長頭鏡 1					人骨2体	
C-5	2.45	3.10	1.55	1.25	0.66	0.90	1.00	1.27	X 95.70W	丸天井形	板?	62.8m	大型圓盤 1 扣 3 环身 8 环蓋 9 威 1 高环 4 台付鏡彌生	刀子 3	鐵片	耳環 4 ガラス小玉 水晶玉 1		人骨4体	



菅沢谷横穴群全景(北から)



菅沢谷横穴群全景(南から)



A-1号横穴(右)とA-2号横穴



A-1号横穴玄室



A-1号横穴の閉塞状況



A-1号横穴奥門付近

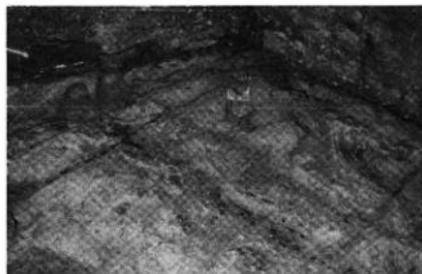


A-3号横穴前部

図版 2



A-3号横穴羨門付近



A-3号横穴玄室



B-1号横穴(左)とB-2号横穴



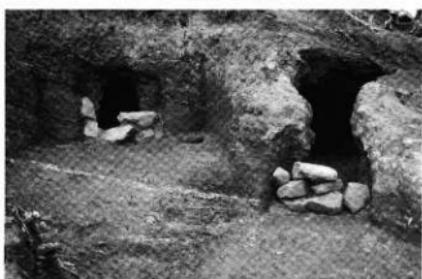
B-2号横穴玄室



B-1号横穴全景



B-3号横穴内部



B-4号横穴(右)とB-5号横穴



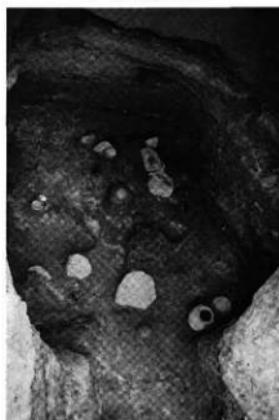
B-4号横穴の閉塞状況



B-4号横穴玄室



B-5号横穴羨門付近



B-5号横穴玄室



C群横穴墓の全景(右からC-1)

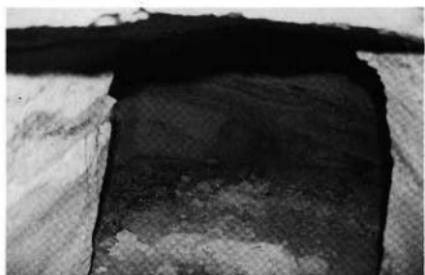


C-1号横穴の人骨の取り上げ



C-1号横穴前庭部

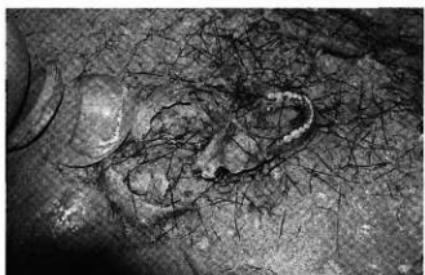
図版 4



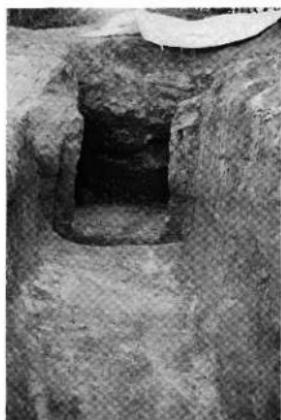
C-1号横穴玄室(検出時)



C-1号横穴の人骨(検出時)



C-1号横穴の人骨(頭骨部分)



C-2号横穴前庭部



C-1号横穴前庭の高壙群



C-2号横穴(右)と C-3号横穴



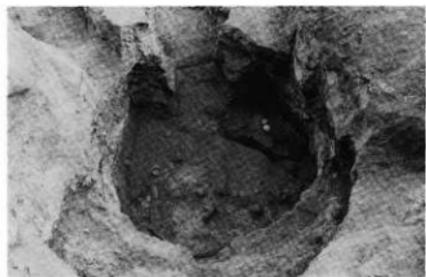
C-2号横穴から続く遺構(C-2号玄室内から)



C-2号横穴玄室



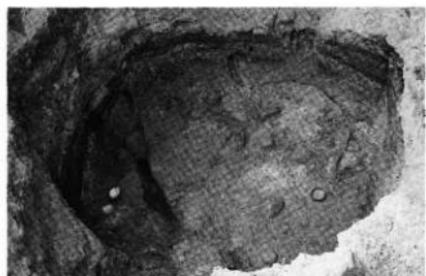
C-2号横穴から続く遺構 (C-3号横穴から)



C-3号横穴玄室(西から)



C-3号横穴検出状況



C-3号横穴玄室(東から)



C-4号横穴検出状況

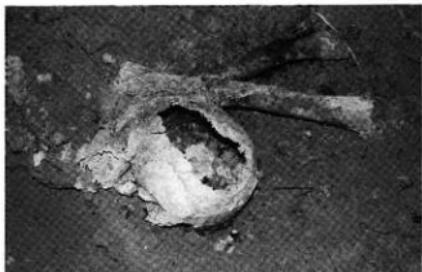


C-3号横穴前部

図版 6



調査中のC-4号横穴羨門付近



C-4号横穴玄室内部の人骨



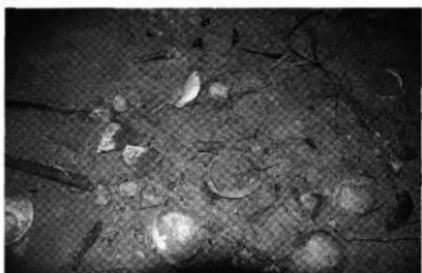
C-5号横穴前部



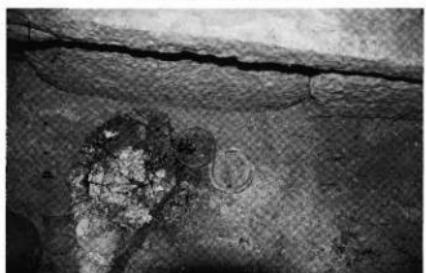
C-5号横穴羨門



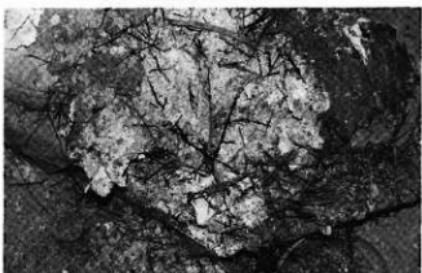
C-5号横穴玄室(検出時)



C-5号横穴玄室床面(検出時)



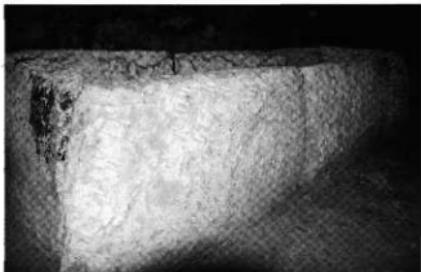
C-5号横穴1号人骨(頭骨付近)



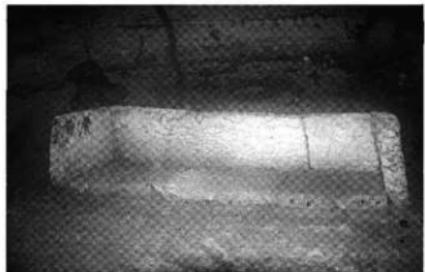
C-5号横穴1号人骨枕石付近



C-5号横穴石棺



C-5号横穴石棺 (蓋石除去)



C-5号横穴石棺内部 (右側石除去)



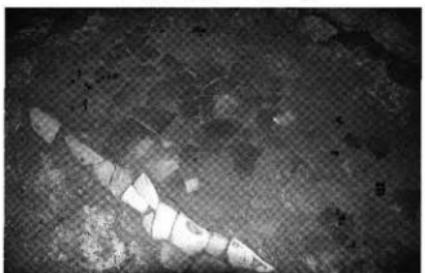
C-5号横穴石棺床石の状況



C-5号横穴石棺の蓋石 (一部)



C-5号横穴石棺内部の状況



C-5号横穴玄室右侧須恵器床

図版 8



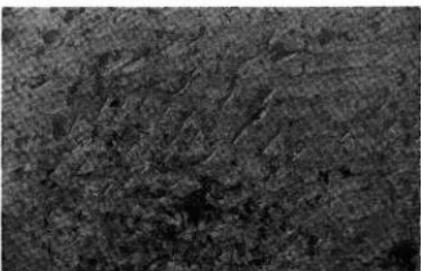
C-5号横穴内部から羨門を見る



C-5号横穴の人骨の取り上げ



石棺の石材



蓋石についたノミ痕

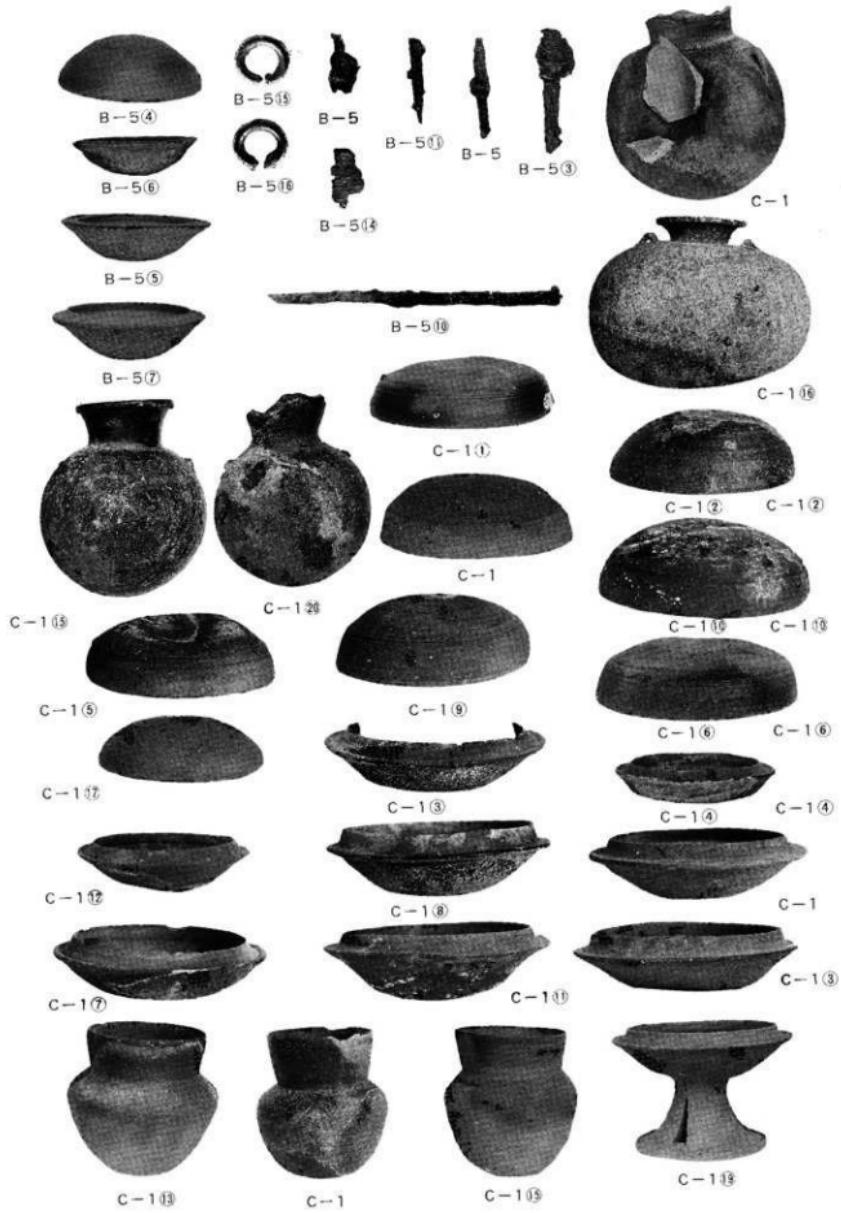


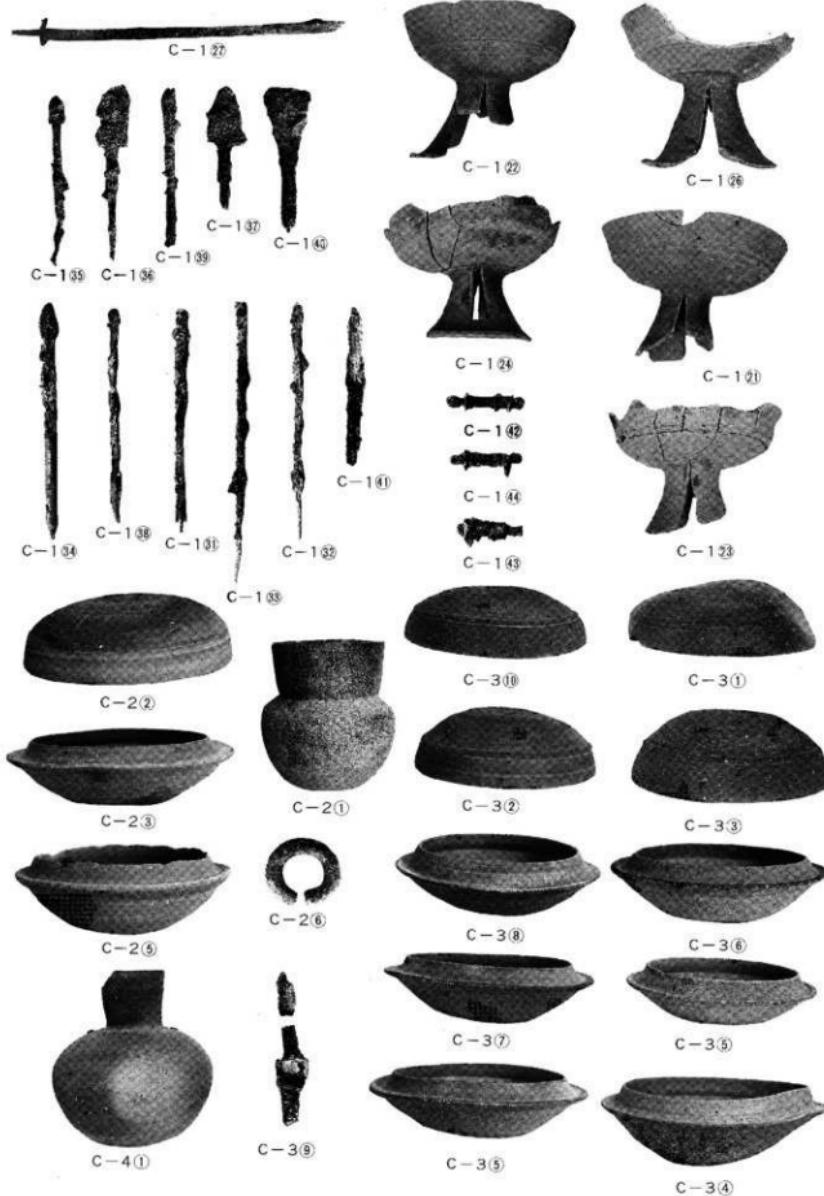
C-5号横穴玄門側小口石の内面



C-5号横穴玄門側小口石の外









菅沢谷横穴群出土人骨について

鳥取大学医学部法医学教室

井 上 見 孝

I. はじめに

松江市乃白町の菅沢谷横穴群12穴のうち、人骨が出土したのは3穴（C-1, C-4, C-5）であった。

C-1号穴では3体、C-4号穴では2体、C-5号穴では3体（他に1体消失）で被葬者数は9体で、性別は♂4体、♀2体、性別不詳3体であった。

各横穴毎に出土人骨について1) 骨の遺残性 2) 遺残骨 3) 性別 4) 推定年齢 5) 推定身長の順に記述する。

II. C-1号穴出土人骨

玄室内は大きく中央の溝で左右に分割され、玄室入口側からみて、左側に2体が埋葬されており、玄室右側に1体が伸展位で埋葬されていた。

玄室入口から左側手前方向に頭位をおき、奥の方に足位を配する伸展位の人骨を1号人骨と仮称する。左側奥の方を頭位にして玄室入口側に向う人骨を2号人骨と仮称する。

この2体は下肢骨を交差する形状で埋葬されていた。これらの被葬者の骨の遺残性はやや不良であった。

玄室右側入口手前に、下顎骨の一部と乳臼歯1ヶが散在しており、これを3号人骨と仮称する。この被葬者の骨の遺残性はきわめて不良である。

1. 1号人骨

1) 骨の遺残性

1号人骨は骨格順に遺残するが、2号人骨よりも、骨の遺残性は悪い。

2) 遺残骨

① 頭骨

頭蓋骨：大きく破損

頭頂部、左右側頭部、左右上頸部

下顎骨：比較的良好

歯牙：すべて釘植歯

6	5	4					7	8							
8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8

② 脊椎骨

胸椎骨：胸椎体1ヶ

腰椎骨：第5腰椎骨の一部

③ 胸郭骨

肋 骨：右；3肋骨片

④ 上肢骨

上腕骨：右；骨片化

⑤ 下肢骨

大腿骨：左；ほぼ完形 全長360mm

右；下端部欠

脛 骨：左；骨体部

右；骨体部

腓 骨：左；骨体部

3) 性 別

下頸骨と歯牙の諸形状と四肢骨が一般的に細くきゃしゃであることから、女性と推定する。

4) 推定年齢

年齢を推定する部位が少ないが、歯牙の咬耗度は1'～2"であることから、年齢は壮年前期位が推定される。

5) 推定身長

下肢骨長からピアソン法¹⁾で136cm、藤井法²⁾で142cmであるが、ピアソン法は少し低目であるので、藤井法の方がより実身長値に近いと思料するので、身長は142cm位と推定する。

2. 2号人骨

1) 骨の遺残性

頭骨は骨片化。四肢骨を中心に遺残。四肢骨は上、下端を欠き完形の骨はない。骨の遺残性はやや不良である。

2) 遺 残 骨

① 頭 骨

頭蓋骨：骨片化、多数

歯 牙：すべて遊離歯牙（歯冠部のみ、歯冠部一部欠あり）

△ △ △ △ △ △	△ △ △ △ △ △
7 6 5 4 3 2	1 2 3 4 5 6 7
8 7 6 5 4 3 2 1	1 2 3 4 5 6 7 8
△ △ △ △ △ △ △	△ △ △ △ △ △ △
△	△

△：遊離歯牙

② 胸郭骨

肋 骨：左；肋骨片2

右；肋骨片1

③ 上肢骨

上腕骨：右；骨体中央部

尺 骨：左；骨体中央部

④ 下肢骨

寛 骨：左；腸骨部（寛骨臼窩部と周辺部）

右；腸骨部（寛骨臼窩部と周辺部）

大腿骨：左；ほぼ完形（下端一部欠），410mm

右；ほぼ完形（下端一部欠），405mm

脛 骨：左；骨体中央部

腓 骨：左；骨体中央部

右；骨体中央部

3) 性 別

四肢骨の大きさ，腸骨の大坐骨切痕の形状からして，男性と推定する。

4) 推定年齢

遊離歯牙の切歯の咬耗度はプロカーチの2°，臼歯部はプロカーチの1°であることから，年齢は壮年前期位と推定される。

5) 推定身長

大腿骨長からビアソン法で158cm，藤井法で156cmであるので，身長は156～158cm位と推定する。

3. 3号人骨

1) 骨の遺残性

玄室右側入口部に下顎の一部と乳臼歯1ヶが遺残していることから，入口側を頭位にして右壁に沿って奥の方へ伸展位で埋葬されていたと推定する。骨の遺残性はきわめて不良。

2) 遺 残 骨

骨：右下顎の一部のみ

歯 牙：右下第2乳臼歯

3) 性 別

乳臼歯からの性別は判定困難であるので，不詳である。

4) 推定年齢

第2乳臼歯が遺残することから10才前後が推定される。

5) 推定身長

遺残骨がないので，身長は不詳である。

II. C-4号穴出土人骨

横穴内には，人骨が散在し，白骨後明らかに人為的移動がなされている。

玄室入口から右側入口部に頭骨と下肢骨が集骨状に位置し，玄室中央部から右奥にかけてななめに

上肢骨と下肢骨のみが散在していた。骨の遺残性は不良で、完形の骨はなく、遺残骨は全般的に脆弱化していた。

1. 1 号 人 骨

1) 骨の遺残性

玄室内には、骨が集骨状又は散在しているが遺残性は不良である。

2) 遺 残 骨

① 頭 骨

頭蓋骨：顔面部、左右側頭部、上顎（臼歯部）と頭蓋底面の一部

歯 牙：

8	7	6	5		5	6	7	X
§							§	

△

△：遊離歯牙

×：歯槽開放（死後欠）

§：破損部位（上顎前面部）

② 上肢骨

肩甲骨：右；関節窩部のみ

③ 下肢骨

寛 骨：左右不明、腸骨の一部

大腿骨：左；上、下一部欠、440mm

：右；上、下部欠

脛 骨：左；骨体中央部のみ

右；ほぼ完形、345mm

左右不明；骨体中央部（骨片化）[※]

3) 性 別

頭蓋骨と下肢骨（大腿骨と脛骨）の諸形状から、男性と推定する。

4) 推 定 年 齢

① 頭蓋冠縫合

冠状縫合：右；迂曲部と側頭部融合

矢状縫合：孔間部のみ融合

人字縫合：未融合

② 口 蓋 縫 合

切歯縫合：欠

正中口蓋縫合

口蓋骨部：一部融合

横口蓋縫合：左右外側部一部融合

③ 歯牙の咬耗度

臼歯部：プローカーの1°～2°

以上から年齢は壮年後期位が推定される。

5) 推定身長

下肢骨長から、ピアソン法で161～164cm、藤井法で160～164cmであるので、身長は160～165cm位と推定する。

6) 被葬者数

玄室内には、遺残骨をみると、頭骨(1)，大腿骨(左1，右1)，脛骨(左1，右1，左右不明1)であることから、被葬者数は2体である。即ち、左右不明の脛骨骨体中央部(骨片化)[※]を2号人骨と仮称する。

2. 2号人骨

1) 骨の遺残性

左右不明の脛骨骨体中央部(骨片化)のみで、骨の遺残性はきわめて不良である。

2) 遺残骨

下肢骨

脛骨：左右不明の骨体中央部(骨片化)

3) 性別

骨片化しているので、性別不詳。

4) 推定年齢

1号人骨(♂)の脛骨は、かなり硬くしっかりしているが、2号人骨の脛骨(左右不明)は、剥離状で骨片化し、遺残性がきわめて悪いことから、骨の未熟性が考慮されることから、若年者が推察される。

5) 推定身長

本屍骨からは身長は不詳である。

IV. C-5号穴出土人骨

玄室入口から左側の石棺内の人骨を1号人骨、それより右側に向って順に、2号人骨(遺残骨なし)、3号人骨と4号人骨の4体が埋葬されていた。

骨の遺残性は、一般的に不良であった。

1. 1号人骨

1) 骨の遺残性

石棺内には、脛骨(左右)のみが遺残、脆弱化でもろい。骨の遺残性はきわめて不良。

2) 遺残骨

下肢骨

脛骨：左；骨体中央部、骨片化

右；骨体中央部

3) 性 別

遺残骨がきわめて少なく、性的特徴を示す部位がない。脛骨の横径、周径も小さく、細くしゃしゃであることから、女性と推定する。

4) 推定年齢

遺残骨が少なく、石棺の大きさと下肢骨の位置から推察すると、年齢は10代前半位が推定される。

5) 推定身長

遺残の下肢骨の脛骨（破損）からは、身長は不詳である。

2. 2号人骨

1) 骨の遺残性

骨は全く遺残していない。

2) 遺 残 骨

なし。

3) 性 別

不詳。

4) 推定年齢

本横穴の骨の遺残性は一般に不良であるが、2号人骨の骨の遺残を全く認めない。ということは、骨が未熟のため、骨の遺残が悪かったことも推察される。恐らく10才未満の小児か幼児が埋葬されたと推察する。

5) 推定身長

遺残骨が全くないので、身長は不詳である。

3. 3号人骨

1) 骨の遺残性

骨は、中央部に集骨状に遺残するが、遺残骨は少數にとどまり、遺残性は不良である。

2) 遺 残 骨

① 頭 骨

歯 牙：4ヶ

△	△	△	△
7	6	3	1
—			
△：遊離歯牙			

② 上肢骨

上腕骨：左；骨体下部へ下端部

手 骨：左右不明；手根骨7ヶ（破損）

左右不明；中節骨片1ヶ

③ 下肢骨

寛 骨：左右不明；寛骨臼窓部のみ

脛 骨：右；骨体骨片化

3) 性 別

骨の遺残が少なく、断言できないか、上腕骨と脛骨の諸形態からして♂ (?) と推定する。

4) 推 定 年 齡

骨の遺残が少なく、年齢推定も困難であるか、四肢骨の大きさは成人域、歯牙の咬耗度はブローカーの 1° ～ 2° であることから、壮年後期位が推定される。

5) 推 定 身 長

本屍骨からは、身長は不詳である。

4. 4号人骨

1) 骨の遺残性

4号人骨は、玄室入口から右側の壁に沿つて、頭位を入口側にして奥の方に向って伸展位で埋葬されていた。骨は上肢骨1ヶと下肢骨7ヶが遺残、遺残性はかなり不良である。

2) 遺 残 骨

① 上肢骨

上腕骨：左；骨体中央部～下端部

② 下肢骨

大腿骨：左；ほぼ完形、453mm

右；脆弱化、453mm

脛 骨：左；骨体中央部

右；骨体中央部

足 骨：左；踵骨、距骨片

右；距骨片

3) 性 別

下肢骨の大腿骨、脛骨の諸形態からして、男性と推定する。

4) 推 定 年 齡

遺残する上、下肢骨からは、年齢推定は困難である。年齢は壮年位が推定される。

5) 推 定 身 長

左右の大腿骨長から、ピアソン法で167cm、藤井法で167cmであるので、身長は167cm位と推定する。

V. 考 察

C-1号穴の左側には、男女2体が頭位を反対にして下肢骨を交差する形状で埋葬されており、この男女はきわめて親密な関係が推察され、夫婦関係が思料される。

このような事例として

1) 古墳（箱式石棺）例

島根県加茂町川子谷B 1号墳³⁾ の箱式石棺内の男女

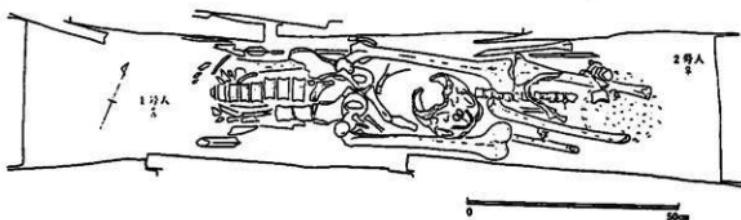


図1. 川子谷B 1号墳出土人骨

人骨	骨の保存状態	性別	年齢推定	身長推定	血液型	続柄
1号人骨	やや良好	男性	壮年（30代前半位）	165cm	A型	夫？
2号人骨	やや悪い	女性	壮年（20代）	145cm	A型	妻？

2) 横穴例

島根県三刀屋町東下谷 6号穴⁴⁾ の男女2対例

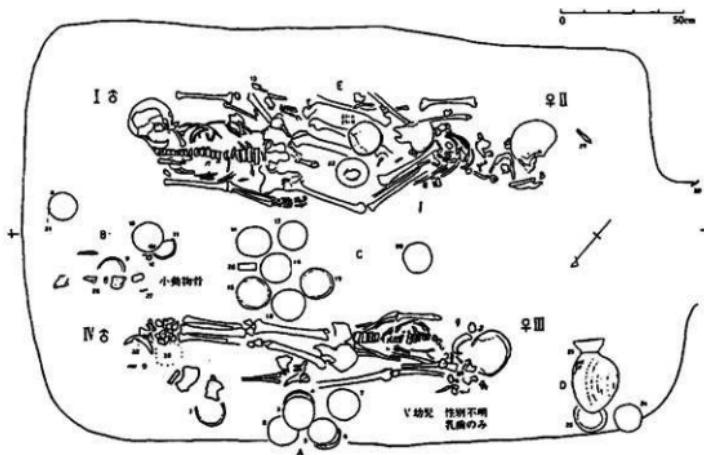


図2. 東下谷 6号横穴遺物出土状況

人骨	骨の保存状態	性別	年齢推定	身長推定	血液型	続柄
1号人骨	良好	男性	壮年(30代)	150cm	B型	夫?
2号人骨	やや悪い	女性	壮年(25才前後)	147cm	A型	妻?
3号人骨	やや良好	女性	壮年(20代)	143cm	B型	妻?
4号人骨	悪い	男性	壮年(30才前後)	154cm	B型	夫?
5号人骨	不良	不明	幼児(2~5才位)	不明	B型	兒?

このような下肢を交差する埋葬形式は、山陰地方ではきわめて珍らしい形式である。

横穴の場合、奥の方が♂、入口側の方が♀であることも、C-1号穴と東下谷6号穴の事例では共通点があることは、今後の埋葬形式を検討する上で注目したい。

次に、本横穴の右側に乳臼歯1ヶが散在、骨の遺残がきわめて悪いが、10才前後の小児が埋葬されている。

このことは、横穴墓⁵⁾は家族墓的性格が強いことから、本横穴の3被葬者の関係は、夫婦と子供の続柄と思料している。

VII. まとめ

松江市乃白町の菅沢谷横穴群(12穴)のうち、3穴から人骨が出土した。

C-1号穴の出土人骨は3体、玄室左側に成人男女2体が頭位を反対にして下肢骨を交差する形状で埋葬されており、夫婦関係が思料される。玄室右側には、10才前後の小児が埋葬されていた。これら被葬者3体の関係は、夫婦と子供の続柄と思料される。

C-4号穴の出土人骨は2体、壮年後期の男性と性別不詳の若年者(?)の骨が集骨状又は散在していた。

C-5号穴の出土人骨は4体、玄室左側から右側に順に伸展葬で埋葬されていた。最も右側の石棺内には、1号人骨は10代前半位の♀、2号人骨は骨の遺残を認めないが、恐らく未熟骨のため、骨が消失したものと推定、10才未満の小児(幼児)が思料される。3号人骨は壮年後期位の♂(?)が推定され、4号人骨は壮年期の♂が埋葬されていた。

出土人骨の詳細は、菅沢谷横穴群出土人骨一覧(別表)を参考されたい。

参考文献

- Pearson, K. (1899) : Mathematical contributions to the theory of evolution. V. On the reconstruction of the stature of prehistoric races, Phil. Trans. Roy. Soc. London. Ser. A. 192, 169-244
- 藤井 明 (1960) : 四肢長骨の長さと身長との関係に就て、順天堂大学体育紀要3, 49-61
- 井上 晃孝 (1988) : 川子谷B1号墳出土人骨について、神原地区遺跡分布調査・川子谷B1号墳発掘26-32、島根県加茂町教育委員会
- 井上 晃孝 (1984) : 東下谷横穴群出土人骨について、東下谷横穴群発掘調査報告書, 30-48、島根県三刀屋町教育委員会
- 池上 悟 (1980) : 横穴墓、東京、ニュー・サイエンス社

菅沢谷横穴群出土人骨一覧

横穴No	被葬者数	人骨No	性別	推定年齢	推定身長	統柄
C-1	3	1号	♀	壮年前期	142cm	妻(?)
		2号	♂	壮年前期	157cm	夫(?)
		3号	不詳	10才前後	不詳	児
C-4	2	1号	♂	壮年後期	160~165cm	
		2号	不詳	若年者(?)	不詳	
C-5	4	1号	♀	10代前半	不詳	
		2号	不詳	不詳(10才未満?)	不詳	
		3号	♂(?)	壮年後期	不詳	
		4号	♂	壮年	167cm	

第2卸商業団地予定地内遺跡調査（高密度電気探査）

岡日本海開発
浜崎晃

1.はじめに

松江市乃白町地内第2卸商業団地予定地において1穴の横穴墓が確認され、地表踏査の結果、その付近で他の横穴墓が存在する可能性があるため、その横穴墓の数及び分布状況（位置）を特定する事を目的として、平成4年6月に高密度電気探査によって、地表から空洞調査を行った。更にその第1次調査に引き続き、平成5年3月に第2次調査として高密度電気探査を行った。その結果、数穴の横穴墓の存在を推定することができた。

高密度電気探査の原理、探査方法及び解析方法を述べ、調査の結果について以下まとめる。

2.高密度電気探査（調査方法）

電気探査とは地盤を構成している土、地下水、岩石の電気的抵抗の差異に着目して人工または自然に発生した電界を地表で測定し、そのデータから地下構造、特に断層・破碎帯及び地下水脈を推定する探査方法である。空洞調査の場合空洞部において比抵抗が大きくなりその位置を特定することができると思われる。

一般的によく利用されるのは人工的に地盤に電気を流し、見掛け比抵抗を測定する比抵抗法である。地盤の見掛け比抵抗を測定するには2本の電位電極と更に2本の電流電極を使用する。これらの電極の配置から数種の測定方法が考え出されているが、今回行った手法は地下水調査等では最も代表的なWenner法である。その電極配置を図-2-1に示す。

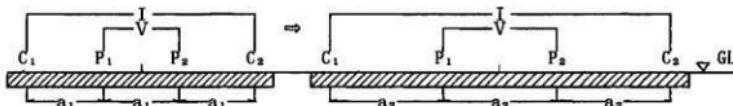


図2-1 測定結果の表示位置

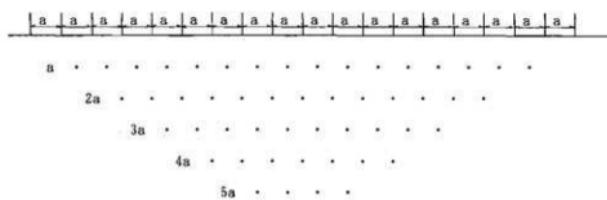
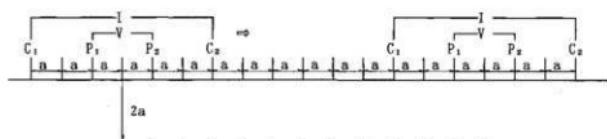
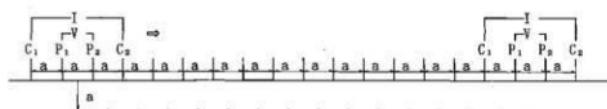
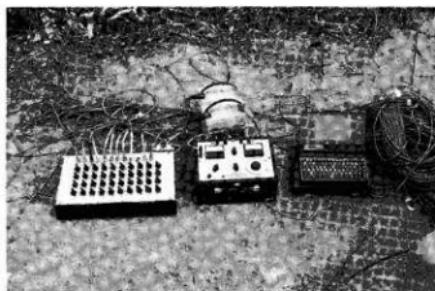
図-2-1に示すように地表上の1点（中心点）を通る直線上に電流電極C₁, C₂、電位電極P₁, P₂を等間隔に配置し、C₁, C₂間に電流Iを流し、P₁, P₂間で電位差Vを測定する。この時得られる比抵抗値は電極間隔をa₁とするとGL-a₁mの地点の比抵抗値を示す。この電極間隔を広げるにしたがって深部探査が行われる。この1点を中心とする探査方法を垂直探査と呼び、電流電極C₁, C₂間に流れる電流をI、電位電極P₁, P₂間の電位をVとするとその時の大地の見掛け比抵抗値は次式により求まる。

$$P = 2 \pi a \frac{V}{I} \quad (a : \text{電極間隔})$$

今回行った高密度電気探査とは電極間隔を一定に保ちながら中心点を測線上で移動させる水平探査と電極間隔を広げていく垂直探査を組み合わせて比抵抗値を測定する探査方法であり、測定点を密にし、測線沿いの地下を見掛け比抵抗断面図として見れる測定方法である。

使用機器及び測定結果の表示位置を次に示す。

* 使用機器 大地比抵抗測定器 Type3244 横河電機
電極切替スイッチボックス Point96 個日本海開発



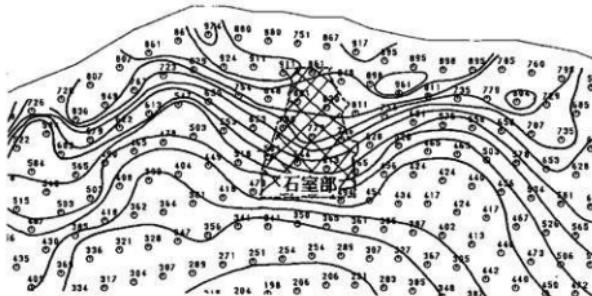
測定結果の表示位置

3. 電気探査結果の解釈

過去に行った遺跡に対する高密度電気探査の経験から地下に空洞が存在する場合のキーポイントと考えられるのは『Camelback』及び塊状高比抵抗域である。

*『Camelback』

下図は岡田山古墳で高密度電気探査を行った時に得られた見掛け比抵抗値の変化である。図に示されるように古墳内石室部を中心にしてその両側で見掛け比抵抗等值線が盛り上がったような変化をしており、その形状がラクダの背に似ている事からこの線形を『Camelback』と名づけて遺跡（空洞）存在のキーポイントとした。



*塊状高比抵抗域

地盤の見掛け比抵抗がほぼ一様で余り変化がない場合、地下に周りの地盤より見掛け比抵抗が高い物が存在する時、その部分を中心に下図に示すような塊状の高比抵抗域が現れる。この塊状の高比抵抗域はその後の発掘調査の結果、地下空洞（横穴墓）が確認されている。この事よりこの塊状の高比抵抗域についても、『Camelback』同様に遺跡存在のキーポイントと考える。



以上のような遺跡存在のキーポイントと現地における地表の状況等を考慮しながら高密度電気探査の結果を検討する。

4. 測線配置と探査結果

平成3年度調査時の電極間隔は0.25m間隔で深度5.0mまでの探査とした。それに対し、平成4年度調査時には、平成3年度調査時の探査結果と発掘調査の結果出てきた横穴墓の規模等を考慮して電極間隔を0.5mとし、深度7.5mまでの探査とした。

測線については地形及び確認されている横穴墓の位置、方向を考慮して横穴墓を横切る可能性が最も高い測線配置とした。その測線配置を図-4-1にそれぞれ示す。



図-4-1 調査地平面図 1:1000

それぞれの測線の探査結果から横穴墓または表面掘削が行われている可能性がある箇所をピックアップし、各ブロック毎にまとめると以下のようになる。

* 1 ブロック

1 ブロックで空洞あるいは表面的掘削が行われている可能性を示す見掛け比抵抗の変化が認められる測線はE-1, E-2である。それぞれの測線の探査結果を示す見掛け比抵抗区分図を巻末の図-4-3に示す。このE-1, E-2測線で見られる『Camelback』及び塊状高比抵抗域はその測線間隔、標高等から一つの物であり別々の物ではないと測定する。したがって、1 ブロックについては図-4-2に示すように1箇所の横穴墓の可能性がある。

* 2 ブロック

2 ブロックの山道沿いには横穴墓が既に一穴確認されており、この横穴墓背後斜面について図-4-1に示す測線配置で高密度電気探査を行った。

2 ブロックで空洞あるいは表面掘削が行われている可能性を示す見掛け比抵抗値の変化が認められる測線はE-2-a, E-2-b, E-2-d, E-2-e, E-10である。

それぞれの見掛け比抵抗区分図を巻末の図-4-3に示す。この中で空洞存在の可能性が高い反応

を示すのはE-2-a, E-2-b測線であり、その位置を図-4-4見掛け比抵抗図に示す。更にこの測線においては断面図中央付近にも『Camelback』が認められる。しかし、この位置は丘の頂上付近に位置するため、横穴墓を掘削するには上被りが薄いため、横穴墓とは異なる何らかの表面掘削が行われた場所と推定する。

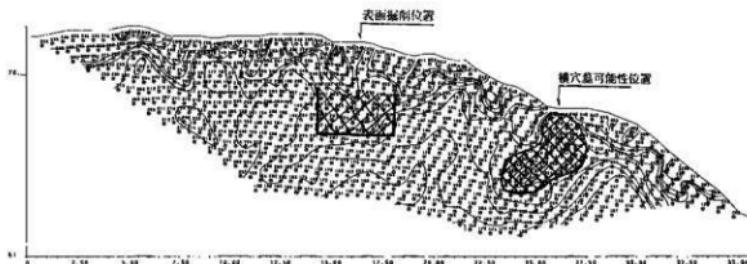


図-4-4 E-2-b 見掛け比抵抗図

他のE-2-d, E-2-e, E-10については『Camelback』が認められるがその反応から個数等を特定する事は難しいため反応の見られる位置をまとめて示すと図-4-2のようになる。このようにある程度の範囲を持った反応を示すのは表面掘削の範囲が広いか空洞が幾つもあるために個々の反応が重なり合って複雑な変化を示すと推定する。

* 3 ブロック

3ブロックにおいて反応の見られた測線はE-3-a, E-3-bであり、それぞれの見掛け比抵抗区分図を巻末の図-4-3に示す。

この測線における反応は図-4-5 見掛け比抵抗図に示すように非常に明瞭な塊状高比抵抗域が現れており、5箇所の横穴墓の可能性がある。

これらの反応はほぼ等間隔に並んでおり、空洞の底面と考えられる深度も地表から約4mとほぼ同じ高さを示している。

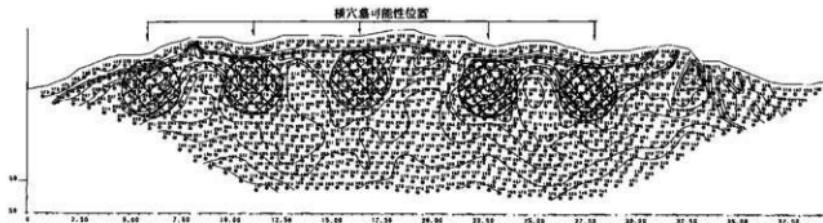


図-4-5 E-3-a 見掛け比抵抗図

この3ブロックについては以上の測線でのみ反応が見られ、その他の測線については空洞あるいは表面掘削の可能性はない。したがって、5箇所の横穴墓を測定する。

* 4 ブロック

4ブロックの中で反応が見られた測線はE-4-a～E-4-cである。これらの測線の中でE-4-aの見掛け比抵抗区分図を巻末の図-4-3に示す。

見掛け比抵抗区分図を見てもわかるように3ブロックでの反応に比較してあまり明瞭な反応ではない。この事はこの反応が空洞による反応ではなく表面掘削による周辺地盤の違いによる変化であると推定する。したがって、4ブロックでの横穴墓の可能性はなく表面掘削が行われた場所としてピックアップする。

以上のように平成3年度、平成4年度調査で行った高密度電気探査の結果について『Camelback』及び『塊状高比抵抗域』を空洞存在のキーポイントとして各ブロック毎に可能性位置をピックアップした。その結果をまとめると以下のようになる。

	横穴墓	表面掘削
1ブロック	1	
2ブロック	1	2 (内1箇所は複数の横穴が存在する可能性あり)
3ブロック	5	
4ブロック		1
計	7箇所	3箇所

以上



図-4-2 調査地平面図 1:400

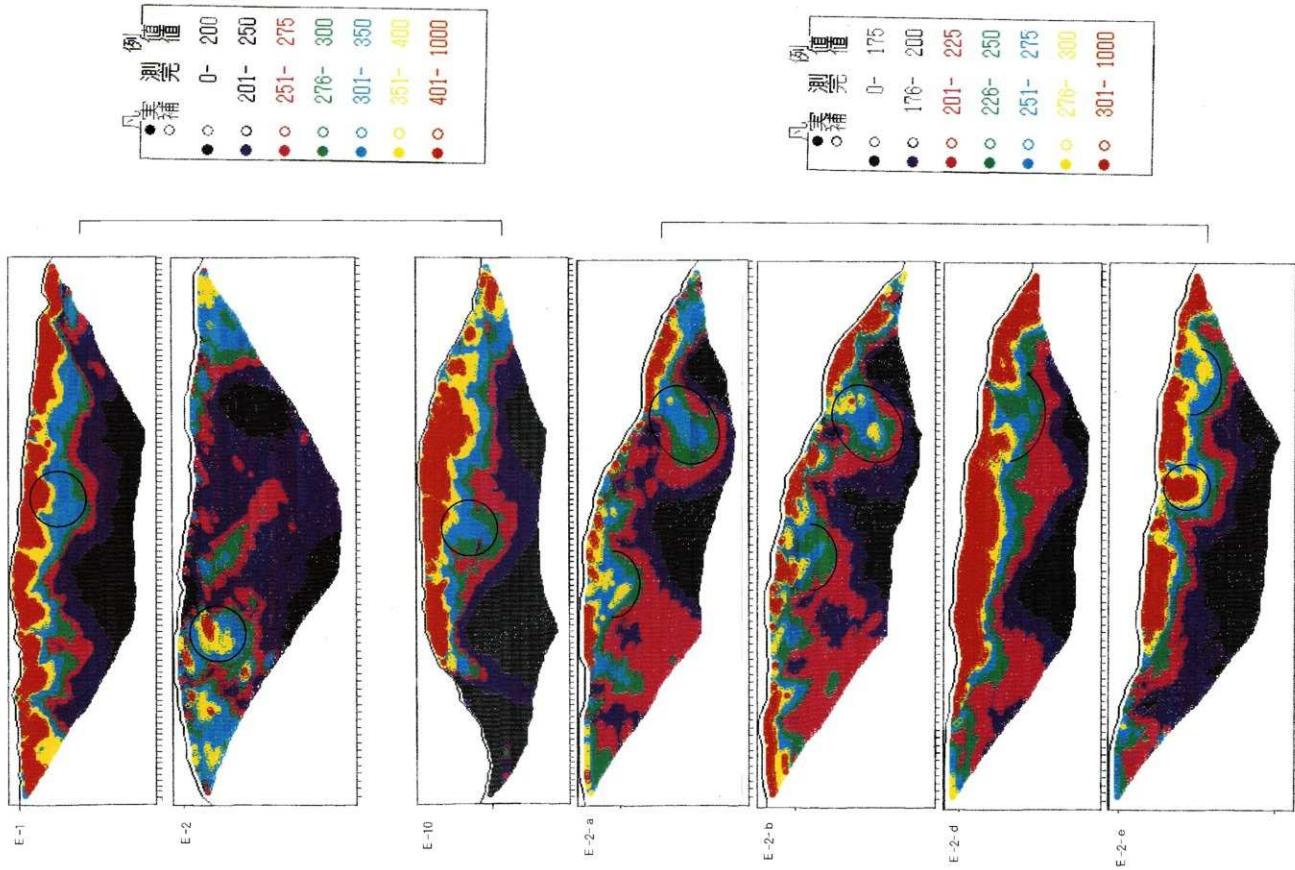


図-4-3 見掛け比抵抗区分図

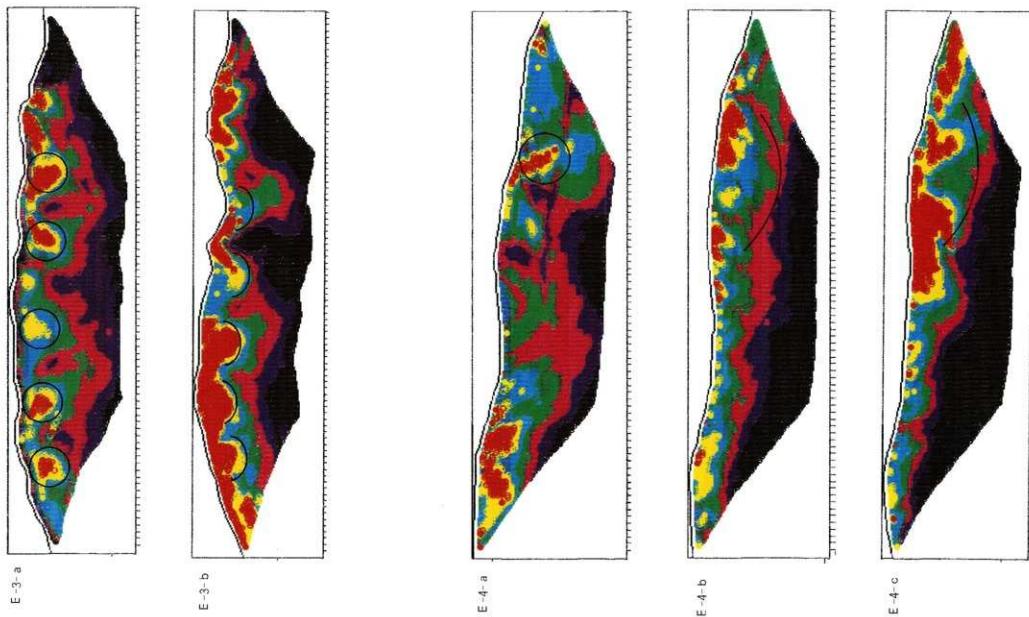
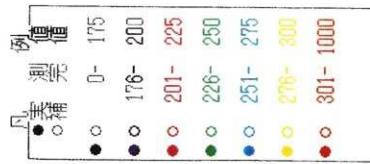


図-4-3 見掛け比抵抗区分図

群六模谷漢首發

1994年3月

發行 購松江市教育文化振興事業團
印刷 有限公司 谷口印刷
松江市母衣町89